



次 目

記事報導.....	價值見直しの時代.....	法華經要文講義.....	日蓮主義より見たる無量義經.....	國と人と教.....
.....	.....	.....	.....	.....
.....	武	本	井	本
.....	田	多	村	多
.....	顯	日	日	日
.....	龍	生	成	生

號月壹年九廿第

大僧正本多日生師著

# うるの奥山今日こえて

一部定價金貳拾錢 郵税金貳錢  
施本用特價拾部金壹圓貳拾錢(送料共)

いろは四十八文字、そこに如何の宗教を藏し、そこに如何の哲學を含める、如來一代五十年の設化八萬四千の法門は、簡約せられて四十八文字に有り、東洋六千年の文化は醇醞せられていろは歌に存す。本書は宗教界の權威本多日生師によつて、眞の人間觀、眞の生死觀、眞の解脱、眞の信仰、眞の道德を講説せられたるもの、釋尊の教に依つて光あり力ある人生の行路を進まんとする者は、必ず精讀せよ。

名古屋市東區田代町城山

發行所

## 統一編輯局

電話東五四八七番  
振替名古屋一〇八一九番

顯本法華宗管長本多日生親下序  
統合宗學林高等部長井村日成著

# 日蓮聖人の宗旨

正價 布裝金參圓  
紙製金貳圓  
郵便書留小包金拾八錢

大僧正本多日生親下著

## 法華經自我偈講義

一部 金貳拾錢 送料 金貳錢  
拾部 金壹圓 (送料共)

# 國と人と教

本多日生

國と人と教との關係をよく了解すれば、いづれも立派なものが成立つと思ふのである。國もよくなり人もよくなり、教もよくなる。善い國であればその國民たる人が善い譯である。善い人であれば善い教を大切にする譯ナンである。これは何處から言つても同じ關係である。善い人が大勢住んで居れば善い國が出来、善い國ならば善い教を大切にするのである。又善い教があればその教に依つて善い人が出来る、善い人が集まれば善い國家が出来、譯ぢや。この三つはどれを頭にしても考へられるので、合計九つの關係を生ずると思ふのである。國と人と教、人と國と教、教と國と人といふやうな場合に繰返して行くといふと、天台智者大師が言ふやうに九つの關係を了解して、さうして最後十番目に國と人と教といふものを纏めて、それが頭でもそれが尻尾でもない、この三つのものが「伊字の三點」といふて、縦でもなければ横でもなければ、一三三の順序でもなければ、三が互に對立して居つて而して一つになるといふ微妙の關係を生ずるものであらうと思ふのである。

その位な事は日本人の常識で了解する程度に我が國の文明を進めたいものだと思は考へるのである。唯だ國が有難いと言つたら國の事だけに引懸つて人を善くする事を忘れたり、人の幸福を論じたならば國家の盛衰を忘れたり、教を弘めると言つたならば國を他所に見たり、いろ／＼つまらない思想がウヨ／＼し

て居るのである。いつ迄もさういふ事で人間が行つたり戻つたりして居れば、狐に摘まれたやうなものである。何時かはさういふ愚なる態度を悔ひ改めて、この三つの關係は只今申したやうに縦にあらす横にあらず、三にして一、一にして三なる實に微妙なものであるといふ風に、國民の了解を進めて見たいと思ふのである。

そこでさういふ事を教へたものが日蓮聖人であると考へます。聖人は「立正安國論」に次のやうに言はれて居る。

夫れ國は法に依つて昌へ、法は人に因つて貴し、國亡び家滅びなば佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信すべきや、先づ國家を祈つて須く佛法を立つべし。(中略) 先づ生前を安んじて更に没後を扶けん、唯だ我が信するのみならず又他の誤を誡めんのみ。

これは先づ最初に教を先にして論が立てられて居る、「國は法に依つて昌へ」といふ事は、善い國を作らうと思へば教を吟味しなければならぬといふ教を出発點にして考へたのである。それから「法は人に依つて貴し」といふ場合は、教が如何に立派であつても人が善くなければいけない、つまり詰らぬ坊さんや詰らぬ信者が殖えてしまへば、結構な法華經があり日蓮主義があつても腐つてしまふ譯である、その場合には人が大事であるといふのである。これは先づ教と國とを論じて教の方を見て、教と人とを論じて人を表てに見て論が立てゝあるけれども、今言ふ最後の十番目に至つてそれが頭とも尻尾とも順序を見ないで、一遍に國も大事、人も大事、教も大事、ウンさうぢや、成程といふ、斯ういふ一つの觀念に迷ひなければならぬものである。それであるから直ぐその次の句に至つては今度は國の方を頭に立て「國亡び人

滅びなば佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信すべきや」といふやうに、國が亡び人が滅びてしまつたならば佛様も教もあつたものではない、皆打ち壊されてしまふぢやないか、だから先づ國家を祈つて須く佛法を立つべきではないか。この場合には國と人とを第一第二に置いて教は第三に置かれて居る。斯ういふ事はその一句々々を考へたのでは駄目ナンである、それを一句々々に因はれて「國より教が大事ぢや、國は法に依つて昌へ」とあるぢやないか、「ナーニ教より國の方が大事だ、國亡び人滅びなば法をば誰か信すべきや」とあるぢやないか、どうだ」といふやうな事を言つて、切つ端の所で喧嘩をするやうな者は之を三角あたまで言ふのである。それがどれでも一になり、二になり、三つ互に縦にあらす横にあらざるところの圓妙なる關係を理解するといふ事が、すべての問題に就て法華經の教へて居るところの妙法といふものである。そこで吾々がお話するのも、時に依れば教が一番大事である、教に依つて國は昌へるといふ論を立てる時もあるし、又國が大事だ、國が亡びたならば佛法もあつたものではないと言つて、國を表にして論を立てる事もある。それは議論といふものはどちらを表にしてゝも話の順序次第は立てられるけれども、結局する所は、縦にあらす、横にあらざる關係のものぢやないかといふ事を理解すべきであらうと思ふ。

所が先づ今日の場合に於ては、國が大事だと考へて居る立場の人と、人が大事であると考へて居る立場の人が相當多い。けれども教が大事だと思ふ人が少ないからして、そこで一番缺けた所へ突込んで行かなければならぬから、日蓮主義者が教が大事ぢや」といふ言葉を、ヨリ多く使ふのである。日蓮聖人の御遺文もさういふ風にあらはれて居るのである。世の中の人には國家が大事だといふことを一通り考へて居るけ

れども、併しこの三つの關係を適當に理解しない限りには、決して健全なる國家が成立つものではない。國は國としてひとりで成立つて居るものではない、國とは何ぞやといつたならば、先づ國は領土といふ土地を有つて居らなければならぬ、併し土地ばかりあつて見たところが、それで國といふ名は附かぬ、それは唯だ土地である。國家といふものはそこに住んで居る所の國民が無ければならぬ、それは即ち人である。併し人が幾ら澤山あつてもそれを纏めて行くところの中心がなければならぬから、主権といふものが要るのである。此の領土と人民と主権といふものがあつて初めて國家といふ名が附いて居るのである。その中では無論主権が大事であるが、併しその國家を構成して居る所の人といふものが衰へ、人といふものが間違つて居たならば、その國は決して健全に發達するものではない。

所が國が人をまもるといふことは、多くの場合に表面の事からのみ考へられて居る。即ち人民の幸福を保全するといつたならば、生命財産の保護といふ言葉で言ひあらはされるのである。國民が國內の悪人の爲に殺されるときか、盜賊の爲に財産を盗まれるといふ事の無いやうに、或は他國人の爲にその國民が生命財産を奪はれることの無いやうに、内に外に國民の生命財産を保全するといふ事が、國家の一番大事な任務として考へられて居る。無論表面から言へばそれは大事なことに違ひない、殺されてしまつて命が無くなればそれ切りであるから、命が大事に違ひない。けれども國家の仕事が唯だ生命財産を保護するといふだけの事で行つたのでは、その國といふものは健全に發達するものではない。何故かといへば、國家がまもると言つた所でそれは何がまもるのであるか、各々職業を分擔してその國家のまもる仕事をする者は軍隊であり、或は警察官であり、その他の役人であり、いろいろの組織態度に依つて國民の生命財産を保護

する譯ナンである、それより以外に別に國家の保護といふものがある譯ではない。所がさういふ任務に當る所の人間その者が悪くなつて来て、警察官は弱くなつて錢にならなければ動かぬ、泥棒が入りましたから来て下さい」と言うて行つても「ちよつと待つて呉れ、今便所へ行きたいから、便所へ入つてから行つてやる」といふやうな譯で、泥棒が逃げた頃をはかつてヤツと行くとか、或は區役所へ行つて願書を一つ頼んでも、役人に錢をやらなければ言ふ事をきいて呉れぬといふやうな事になつて來ると、なか／＼國民の生命財産の安全といふものが思ふやうに圓れなくなる。それを綱紀を肅正するな、言つて怒鳴り散らして見ても、腐つた人間は大聲で怒鳴つても直らないものである、叱り飛ばしても改まらないものである。之を家庭の不良化せんとするところの子供に就て考へて見たらわかる、性質の悪くなつてしまつた子供は、叱つたり、虐めたり、押入の内に押込めたりしたら直るかといふと、さういふ教育方法を採つたら益々悪くなつてしまつて、今度はモウ手に了へぬやうな者が出來るのである。そこで政治家が悪くならうが、教育家が悪くならうが、叱り飛ばすやうな方法に依つて之を改善しようとするならば、それは頗る策の拙なものである。

それなれば如何にすれば善くなるか。どうしても人間を善くして行く方法といふものは、教を以てその人間の人格を高めて、精神的に之を導くより外方法は無いのである。悪くなつて來たからこいつて「貴様ッ其の態は何だッ」と言つて叱り飛ばすやうな事をしてはいかぬ、お前も同じ人である、表面はおの／＼顔色が違つても、その本性、本質に於ては皆尊いものを有つて居るのであるといふ人格を認めて、さうして假令如何なる横着な殺人であらうが何であらうが、その人格に對して教化を興へて行かなければいかぬ。

假に茲に非常な不良児がある、この不良少年を改過遷善せしめようとしたならば、之を頭ごなしに叱り飛ばして直るかといへば、決して直らない、どうしても直らない、やはりその人格を認めて、さうして話らぬ者でも之を相當なる人間と見て導いて行かなければならぬのである。モウ彼等に向つて、直接「不良」といふやうな事を一遍言うたら、それでモウその人は永久に教はれないものである、「君達不良少年は……」といふやうな事でツイ訓話の中に一言「不良」といふ言葉が出たら、忽ち彼等は非常な反抗心を起して、「ナニ、不良とは何だ、貴様の厄介にはならぬぞ、この糞ッたれ」といふやうな事を言ひ出して、決して改過遷善の功を奏しないものである。人間の悪くなる者は、モウ悪いと言はれたら非常な反抗心を持つものである。女の人でも無論サウである、「あなたのやうな事を言つては譯がわからぬ」とでも言へば「どうせ妾は馬鹿です、あなたの話など聞きたくありません」と言つて横を向いてしまふ。「女といふものは愚痴多くしてわからぬ者だ」と一言でも言うたら「あなたの話など初めからわかりません」と言つてツンとしてしまふ、とても手に了へぬ。これは人間に通有して居る所の弱點である。善い方に向つて居る人間は、お前は悪いと言はれたら「成程自分の及ばぬ所があつたか」といふ反省をするものである、けれども今の人間は、なか／＼「お前悪いぞ」と言はれて、改心するほどの程度には居らないものである。坊さんでも「お前は悪い坊主ぢや」と言はれて「恐れ入りました」と言ふのは、よほど上等な坊主である。本當の悪い者は「ナニツ、お前の世話になつて居りはせんぞ、悪からうが善からうが餘計なお世話だ」と言つて却つて反抗する。現代人は殆どその點に於ては悪く言はれて善くなる程な人は少ない。故に議政壇上などに於て交換される政治論といふものは、大抵他のやつて居る所を非難攻撃する方法を以て進んで行くのであるが、その

政黨が互に非難攻撃を交すといふことは、恰も繼母と繼子の睡み合の如くになつて行つて、だん／＼共に悪くなるのみで決して善くはならぬ。これは教化の方法を誤つて居るものである。人間が左様な喧嘩をして善くなるといふ事は決してない、夫婦喧嘩なら夫婦喧嘩を三年も根よくやつたら、兩方の人格が幾らか善くなつて角が取れて善くなるかといふと、決してさうはならぬ、却つて非常に意地の悪い喧嘩の名人となつてしまつて、少々ぐらゐの悪口やどづき合では面白くない、取組み合つて大喧嘩をするといふやうなことになるのである。

そこに於てどうしても教を以てしなればならぬ。これは或る精神に異状を生じて居る人に就て實驗した事でありますが、よほど氣が狂つて無茶な事を言ふやうな人でも、その人に對してやはり人格を認めて「大きに御尤です、どうぞまア薄團をお敷きなさい、成程、々々」と言つて、向ふがつまらぬやうな事を言つて居つてもこつちが眞面目に「御尤です、大きにさうです、あなたの話はよく筋が立つて居ります」と言つて聽いて居ると、だん／＼向ふも落着いて来て、二時間も話をして居る間には大抵の狂人はよほどよく直つて来るものである。それを頭から「ア、此奴は狂人だな」と思つてかゝるから、向ふが何か言うても「狂人の言ふ事ナンか聽いてもつまらぬ」といつて相手にしない、そこで向ふは益々氣がイラ／＼して来て突然暴れ出すやうなことになるのである。さういふやうなものであるから、悪くなりつゝある所の人間に對しては、法律を以て直るものでもなければ、叱言を以て直るものでもなければ、殴り飛ばして直るものではない。事今日の如き有様に至つた者は、教を以て諄々とその人格の改善向上を促すより外に途が無いといふことを了解すべきである。

そこで國といふものを大切と考へて居る人は、その國家の健全なる活動、所謂國民の幸福を保全し、文化を進歩せしめて行くといふ國家の事業を成し遂げようとするには、どうしても教に基いて、その國家的の仕事に参加する人間に先づ人格を造らなければならぬ。他の言葉を以ていへば、政治に参加する人とか、教育に参加する人とか、或は軍隊とか警察官とか世の保護者となるやうな地位に居る人間の人格を造り上げるが爲に、それ等の人が一番に覺醒めて教を尊崇するといふ事に來ない限りには、國家は決して健全には復らないものであると思ふのである。それ故に國といふ事を考へても、直ぐに人の問題があり、教の問題があるのである。

今度は人間本位といふ事に引懸つて居る者が、國などはあつても無くても人間が本ぢや、お互ひ人間さへ都合よければ宜いのぢや、人間の都合の爲に國家といふものはあるのぢやと言つて、人本主義など、稱へて、人間々々といふ事のみ考へて居る議論が世の中にある。それは大きに尤もぢや、人間さへ都合よく行くなれば何も要らぬかも知れない。所が人間が都合よく行かうとするに就ては、形の方に於ては國家といふ組織が無ければ人間の都合はよく行かないのぢや。今日の世界の文化の組織を見るといふと、これは國家的對立の文明である、これを呪ふ聲も起つて居るけれども、事實は世界の地圖を開いて御覽になつたならば、良い所はみな國家組織に依つてこれを占領せられて居るものである。或は亞米利加であるとか、或は英吉利、佛蘭西、獨逸、伊太利、露西亞といふやうな譯で、世界の優秀なる地點といふものは、みな悉く國家組織の權力關係の中に統轄されて居るものである。その外に空いた所があるやうであるけれども、其處は寒くて氷ばかり張つて居るとか、あまり暑くて人間が住むことが出来ぬとか、砂ばかり

で大根一本も生へぬとかいふやうな所で、決して立派な所ではないのである。氣候もよし物もよく出来るといふやうな所は、みな國家の權力に依つて支配されて居るものである。故に地球は廣く人類は多いといつても、殆んどその總ては國家組織の支配下に於て成立つて居るものである。「お前は何處の國の者ぢや」と言はれて「私は何處にも國ナンといふものには屬せない、風來坊であります」といふやうな者は、何處へ行つても大體港から上陸することも出来ないものである。宿屋に泊つて宿帳を一つ記けるといつても「俺は何國の者でもない、風來坊にて候」ナンと言つたならば「それではお泊めする譯に行きません、お歸りです」といふ事になつてしまふ。さうして人の家の軒下でもウロ／＼して居れば、直ぐ巡査がやつて來て「貴様は何處だ、何處の人間だ」「何處の者といふ譯でもありませんが……」「怪しい奴だ、ちよつと來い」とやられるのである。それ故に國家に屬せないやうな者は世の中に何の仕事も出來ず、又幸福を受けることも出來ないものである。この明かな事實を考へないで、それはさうではない、今は國家の境界を超えて、國家の區域を減して所謂階級闘争の時代に達したものである。世界の労働者は國家の境界などを超越して労働者の團結をせよ、世界の労働者よ、團結して階級戦争を開けよ……「成程面白いナ」といふやうな事を言うて居るけれども、それは皆だまし文句である。事實世界の労働者が聯合をして、さうして國家の關係を離れて互に幸福を保全して居る所が何處に在るか。第一日本人といふ者は亞米利加に行つて三十年來日本本の労働者が苦心經營の結果成功して居つたものが、初めは亞米利加の労働者の爲に排斥をされ、その亞米利加の労働者を亞米利加人が味方をして、遂に日本人排斥の所謂日移民法案といふものを決定するに至つたぢやないか。この明瞭なる事實をどうするか。さうして若しこれが尙ほ一層ひどくなつた時分に、

日本の労働者が大いに憤慨をして、吾等の仲間が亞米利加に行つてひどい目に遭はされて居る、この労働者を救ひに行くのだといつて、日本に居る労働者が相當なる準備をして、金を拵へ船を拵へて、命懸けて亞米利加と戦争でもして彼の地に居る労働者の爲に利益をはかつて呉れるかと言つたならば、百年経つても千年経つても、日本の労働者に依つて日本の労働者が救はれるといふ事はなからうと思ふ。此の上モウ一つ不都合な態度に亞米利加が出たならば、その時こそは日本の陸海軍人は日本の労働者を保護するが爲に、可愛い、妻子を捨て、命懸けて戦ふことになるのである。一人たりともそれを辭退する者は無い、帝國臣民の爲めといふことになれば、労働者であらうが立ん坊であらうが、大日本國に籍を置く者であつたならば、帝國軍人は陸海軍擧げて以て奮闘するところの決心を有つて居るものであります。

さういふ譯であるからして人の幸福といふ事を考へたならば、必ずモウ國といふものを離れては人の幸福は無いのである。唯だ對立的に國といふものと人といふものを置いて考へると、國が無かつたら税金などは拂はないでも宜い、悪い事をしてでも巡査もやつて來ないし博奕は打ち放題ぢや……といふやうな譯になるから、國などは無い方が宜いと思ふだらうけれども、それは夢を見て居るのである。實際の場合に遭遇したならば、さういふ事をして居る者は非常な困難な状況に陥つて、國內を擧げて互に相殘賊するところの天下となつてしまふのであつて、一人も幸福を享ける者は無い。故にどうしても人を思へば國の大切なる事に想ひ到らなければならぬ、人を愛して國を思はぬといふやうな者は、ごんまの頭腦なりといふ事をよく考へて置かなければならぬ。

尙ほモウ一つは、人を思へば同時に必ず教といふものに考へ及ばなければならぬ。それは何かといふと、國を思ふといつて見たところがその料簡を定めることも、いろいろな考を決めなければ人間といふものは國の爲めに盡すといふやうな立派な精神が生れて來ないものである。そこで人間は精神の修養を積んで、いろいろ不利益なる所を直し、立派な考を養つて行つて初めてだん／＼に國の爲にも盡し、自分の幸福も享けられるところの人が出來るのである。教から離れたならば、猿が樹から落ちたも同然だといふけれども、猿は樹から落ちて歩いても居るし、芋も拾うて食へるけれども、人間が教から落ちたならば、それは逆も猿が樹から落ちたやうなものではない。然らば人間が教からはなれて落ちたならばどうなるかといふと、生きながら人間その儘豚になつたり、蠅になつたり、蛆虫になつたりしてしまふのである。猿は樹から落ちても猿の姿をして居るが、人間が教から落ちたらその儘動物と變化してしまふものである。まだ動物なら宜いけれども、教と離れたるとき即刻その儘惡魔と變するところの者もあるのである。それ故に人間と教との關係といふものは、しばらくも離れることの出來ないものである。魚は水から離れたらば生存することが出來ない、如何なる魚と雖も、何が一番大事ぢやと言へば水が一番大事ぢやと言ふであらう、鯉であらうが鯛であらうが、鯛であらうが鯛であらうが、水から離れたらば忽ち死んでしまふ。人間が教から離れたらば、恰度魚が水に離れたと同じ關係のものである。それは支那の「六韜」といふ書物の中に、太公望といふえらい人が言うて居る。

魚にして水を離るれば死す、人にして道を離るれば死す。

これは實に千古の格言である。元來「六韜」といふ書物は戰の事に就て書かれた書物であるけれども、戰をするには人間の魂から鍛へて行かなければならぬ、人間の魂を鍛へるには道を重んじ、教を尊ぶといふ

心からして出發すべきものであるから、一切の戦争の根本、國を護る所の根本は、この教を大切にすることからしてなければ軍人の本分は盡せるものではない。護國の本分は竭せるものではないといふ事を言ひ現す時に、今申した「魚にして水を離れば死す、人にして道を離れば死す」といふことが書いてあるのである。所が今の人は「人間が教から離れたつてナニ死ぬものか、俺は統一兩へ行つて信心して居つたけれどもすつぱり廢めてしまつて、この頃では亂暴放縱なる生活に入つて早や既に三年になるけれども、此の通りピチ／＼生きて居る」「ナニ家の親父は生れてから教ナンといふものは振向きもしないけれども、今年七十五だ、七十五年間に於て教などに依らなくとも親父はまだあの通り達者で生きて居る」と言ふけれども、それは人間として生きて居るのではない、動物として生きて居るのである。人間の親が生んで呉れたから顔は人間になつて居る、顔はつくり替へることが出来ないけれども、その心の働きからその價値といふものを言へば、人間の面をして居る動物として存在して居るのである。それは如何なる身分の尊い者でも、一國の總理大臣でも或は一宗の大僧正でも、身分はその時と場合に於て欺いてさういふ地位を贏ち得ても、その人間が心に教を重んじないやうな者はこれ皆動物なりといふ事を考へなければならぬ。これを深く徹底的に考へる事に於て人格の光を生じ、國家の興隆進歩もそこから起つて來るのである。教を重んぜざる時人格なく、人格なき時國家はないのであるから、どうしても人間といふものを考へる時には、一面には國を知り、一面には教を思ふといふことにならなければいかぬ、それが一人前の人間である。他の小さな事をゴチャ／＼覺えて、私は料理を習うたから料理を幾通りも知つて居りますとか、私は裁縫を習うたから色々縫ひ方を知つて居りますとか、私は左官屋になつたから鏝を持つて壁を塗りますと

か、そんなことは人間の小さな末技である。一生鏝を持たなくとも人間の資格に缺くる所は無い、一生前掛一枚縫はなくとも女たるの資格に缺くる所はないかも知れん、けれども教と離れたる瞬間には、如何なる地位を有つて居つても即時それは人間ではない、人間の面をして居る動物と化するものである。之を徹底しなければいかぬ、これを徹底することが本當に一切の根本をなすのであるからして、そこで六韜三略虎の巻といふものは、要するに人は道を離れば死すといふ一言が原動力を爲すものである。

そこでさういふ意味から考へて來るといふと、人を中心にして考へても直ぐに國といふものと教といふものに考へ及ばなければならぬ。國を思ふても直ちに人と教といふものに想ひ到るのである。

今度は教を中心にして考へたときどうであるか。その時には「國亡び人滅びなば佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信すべきや」と日蓮聖人が言うたが即ちそれである。普通の智慧の廻り兼ねた坊さんは、教が大事だといつたら朝から晩まで教に喰つ付いて、暗い本堂で般若心經を讀んでボク／＼やつて居る、教と自分さへあつたならばそれで事足りるやうに思つて居るけれども、國亡び人滅びてしまつたならば、何れの所にか佛法を宣傳するのであるか。そこは非常に大事なことである。大體お釋迦様の教といふものは何の爲に出たのであるか、一方から言へば人間の罪を教つて善を行ふところの人にしてやらう、一方には人間の苦しみを除いて樂みを與へてやらうといふ爲に働かれたのであるが、その罪を除いて善を行ふといふ「善」といふことを考へて見、又苦しみを除いて樂しみを與へるといふその「樂」といふ事を考へて見るといふと、それは善を行ふといふ上に於ては人間の道德の行爲といふものを考へなければならぬ。一人にしては人格を善くし、家庭にしては親に孝行することか、夫婦仲好くすることか、社會に於ては互に相扶け合ふ



とか、國家には忠節を盡すとかいふことを行はなければ、人間が善を行ふといふことにはならない。ところが世間の人は佛法には何か特別の善があつて、如何に悪い事をして居る者でも、お賽銭を上げて、高い蠟燭を買つて——五厘ぐらゐの蠟燭を三錢で買つて點したりすれば、それで助かるかと思つて居るけれども、さういふ譯のものではない。それは舊い型の偽れる善根功德である、五厘の蠟燭を三錢で買つて上げた、その時だけは算盤を外したところが、一方に於ていろいろの罪惡を積んだ者が、差引二錢五厘でその罪を救はれようといふのは、あまりに愚のよい考と言ふべきである。釋迦の教は決してさういふ事は説いて居らない、むしろその反對の事を説いて居られる。

この燈を點したり蠟燭を燃やしたり、色々さういふ形式的の事によつて罪を免れるといふことは、婆羅門の方に於て教へたことである。婆羅門の奴等は祈禱をする時分に蠟燭を何本もく立て、やつて居る。今でもよく迷信の對象となつて居る所にはさういふものがあります。蠟燭立が圓いやうなものに出来て居つて、それに何本でも蠟燭を立てるやうになつて居る、錢を投げては「お蠟を願ひます」「お蠟を立て、下さい」と言つて、むやみやたらに蠟燭を燃やして居る。「お前一體そんな事をして何になるのだ」「何にならぬといふ事はわからぬけれども、とにかく高い蠟燭を立てたら何か功德になるのだらうと思つて、ふだんならば五厘で買へる蠟燭を三錢も出して買つて居るのだ……さういふ事は釋迦如來は非常に不都合な事としてこれを排斥して居る。蠟燭をこゝすといふ事は、燈が無くて仕事も出来なければ書物も讀めないといふ憐れな人に蠟燭を買つてやつて、その光に依つてその人が善い仕事が出来るといふことになつたならば、そこに初めて功德を生ずるのである。それを電燈の明るくついて居るやうな、要りもせぬ所にむやみに蠟燭を立て、燃やすといふ事は、却つて罪にこそなれ、何の善を意味するものではない。

所がそれと能く似た事で護摩を焚くといふ事がある。きれいな木を伐つて来てそれを積んで火をつけて燃やすのである。成田の不動様あたりで盛にやつて居る、「護摩を焚いて下さい」と言つて頼むと、三十錢ばかりの木を焚くと五圓も取られる、さうすると三十錢の木を五圓で買へば、四圓七拾錢だけ高く買ふ事に於て罪を免れるかと思つて居る、それは實に愚な事である。お釋迦様はさういふ事はいかぬと言はれて居る。護摩を焚くといふ事は何であるか、これは實に罪を焼くといふ事を意味するのである。併ながら唯だ形式的に木を積んで燃すといふやうな事をするのであつたならば、世界中の山の木を伐り倒して一度に火をつけても、汝の罪の一微塵をも焼くことは出来ないかと思つて居る。昨年の大震災に依つて東京の家が半ば以上焼けたけれども、この東京中の家に火をつけて焼いたからといって、罪は一微塵も焼けて居るものではない。そんな愚な事をしてはいかぬといふことを、懇々切々一切經の中に説かれて居る、然るに今日の坊さんが婆羅門の尻を舐つたやうな事をやり出したといふのは、これは誰の間違ひぢや。昔の人はえらい人も澤山出て居るけれども、又馬鹿な者もそれに比例してはヨリ多く澤山出て居る譯である。それ等の馬鹿者が、この結構なる佛敎を有ちながらさういふ愚な事をやつたのである。

そこで釋迦の教といふものは、そんな頓間な間拔けたことを世に教へたものではない。釋尊は阿舎の初めに於ても始終お説きになつて居る、我が教を奉ずるところの者は決して邊土の人となることなけれど仰せられるのである。「邊土の人」といふのは、片田舎の譯のわからぬ田舎者といふことで、電車に乗るといふても乗る事を知らないでマゴ／＼して居るやうな田舎の厄介者を謂ふのである。これから東京へ行くに

は斯ういふ所から汽車に乗つて斯ういふ風にして行くのだといつて、何遍教へてもわからぬ、到る處で人の厄介になつて、終ひには自動車によつたつたり何かして病院へ擔ぎ込まれて「お前の國は何處ぢや、電報を打つてやらう」「俺の國は伊勢の國で……」「伊勢の國はわかつて居るけれども、伊勢の國の何郡ぢや」「郡ナンといふことは生れてから聞いた事がありませぬ」……斯ういふ人間があるだらう、それが邊士の人といふのぢや。さういふわからずやの邊士の人となつてはならぬ、佛法をまもるところの者は所謂文化の人となつて、物のわかつた人間を以て立てよといふのが釋迦の教である。然るに佛敎の或る團體を見るとこの頃でも尻からげして變な白いやうな腰巻をペラ／＼出して、手拭を頭に載せて杖を突いて、あつちへ詣り、こつちへ詣りするやうな事を以て佛法だと思つて居る連中がある。斯ういふ文化に遅れた邊士の人が佛法の中に集まるやうになつたといふ事は、非常な間違ひである。佛の教を奉ずる以上は譯のわかつた人格の善い、立派な人になつて行かなければならぬ。それは人を教化するといふ事を忘れて居るから、あゝいふ事が出来て來たのである。教化するどころではない、人を愚にしてしまふものぢや。教に依つて化するのぢやない、迷信に依つて化かしてしまふのであるから、そこで幾歳になつても三角に折つた手拭を頭に載せて尻からげして、お大師詣りナンといつて「南無大師遍照金剛々々々々」と言つて杖を突いてヒヨロ／＼歩いて居る「お前何を言うて居るのぢや、遍照金剛といふのは何だ」「何だつてお前さん、遍照金剛といへば遍照金剛でせうが」……實に低級なること夥しい。それは少しはさういふ者も混つて居ても仕方がないけれども、さういふ者のみを選り抜いて結合せしめたものが佛敎の團體たるかの如きことになつて居るといふのは、甚だ宜しくない事である。それは人を目的にしないからである、下らない或る事柄

を形式的に定めて置いて、それに拘泥して居るから左様な事になるのである。

又國といふことを忘れた教が何の價値があるか。今や人類の文化は國家の組織に依つて發達するのである、若し或る國が衰へ若くはその國が態度を誤つといふことになつたならば、餘の事は悉く毀れてしまふのである。國民として如何に善人であつても、國家としての態度が不正であつたならば、その罪はやはり國民全體が受けなければならぬ。亞米利加人が個人として如何にセントルマンであらうとも、亞米利加の國家が執る態度が日本に對して不正不義であるならば、亞米利加人は悉くその不正不義の罪を受けなければならぬものである。個人が如何に善人であつても、國家的行動を誤つた時に於てはその罪國民に在りといふことに歸するのである。さういふ大きな意味合を佛敎は教へて居るものである。だからして一つ違へば亞米利加人全體が珠數繁ぎになつて閻魔法王の前に引出されて、閻魔法王の一番大きな第一號の法廷にも這入り切れぬといふやうなことが起るのである。亞米利加人が個人として善人であつた所が、この立派な日本人に對して彼の如き不正不義の大罪を犯すときに於ては、必ずさういふ結果を招くものである。

故に國全體の行動を指導せんければいかぬ。所が今はすべてが個人ばかりを善人にする事を考へて居る。西洋では個人と國家の使ひ分といふことから來て居る、個人で交際つて見ると中々優しい善人であるけれども、國家的行動となると臆面もなく不正な事を斷行する、英吉利人然り、亞米利加人然り、往いて言へば歐羅巴人の性格は皆然りと云つて宜いのである。個人としては天國に行くべき人であるけれども、國家全體としては地獄に墮つべき者である。だから一つの人間が二つになつて居る、神様の方からは「天國へ來い」と言はれる、惡魔の方からは「俺達の領分だ」と言つて招かれる、歐羅巴人は皆天國と惡魔の途中

で引張りつこをされて居る人間である。何といふてもさういふことの在るべきものではない、個人の人格も國家全體としての態度もそこに一貫したる所の正義を行はなければならぬものである。

それを理想したもののが即ち佛教であり、日蓮主義である。だから國の行動を善くしなければならぬ。故に國家々と云うても、國家の一番大事なものには正しき教を遵奉する事である。時に依れば國が掌を合せてその善き教を禮拜するやうな國家でなければ、國家は決して發達すべきものではない、發達しても意義を持たないものであるといふことを説いたものである。釋迦如來の如きは、理想の國家は何ものよりも教を大切にしなければならぬといふことを強く説いて居る。轉輪聖王といふのは理想の國家を支配する所の王様であるが、それが太子に位を譲られる時の言葉といふものは唯一つしか仰しやる事はないのである。「吾々先祖より傳へたる轉輪聖王の所謂皇誦と稱するものは唯一つである、これは汝が命に代へて忘れてはならぬ事ぢや」と告げられることが唯一つある。それは何であるか、今まで得て居る所のこの廣い領土、時と場合ごとに依ればこの領土の一部は割かれて奪はれる事があつても、それは己むを得ないかも知れない、強ちに嘆く事はない。時と場合に依れば敵の中に在る所の多くの寶、それを失ふ事があつても敢て意とするに足らないけれども、この國が吾々の祖先以來大切に護つて來た所のこの人の心を教へ導く所の教、法といふものがある。この法を除いては國民の精神を導く事も出來ず、國家の行動を導く事も出來ないものであるから、國土の割れる事よりも敵の中の寶を失ふ事よりも、祖先以來傳へたる所の正しき教、正しき道といふものを一點も瑕を着けぬやうに護つて行く事が、汝の第一の使命であるぞといふことを訓戒されるのである。

これは私は聽つて考へたならば、我が大日本帝國の皇祖皇宗の遺訓と仰せられるのもそれであると思ふ。諸君が記憶を喚起されたならば直ぐ分る事である。明治天皇が教育勅語に示された「斯ノ道ハ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ所」といふ「斯ノ道」といふものは、決して領土でもなければ敵の中の寶でもない、即ち國民の精神を導き、國家の行動を軌範する所の教であり、道であり、法であるべきものが、日本の國に於ても一番大切なのであるから、そこで「朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ威其德ヲ一ニセンコトヲ幾庶フ」と仰せられるのは、即ちその道、その教、その法である。それ故に昨年の十一月十日を以て御發布相成りました所の國民精神作興に関する詔書には、この教育勅語と戊申詔書を並べお擧げになつて、さうしてこの二つは何の爲にお出しになつて居るか云へば「是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非ナルナシ」と斷定せられて居るのである。教育勅語も戊申詔書も、細かく分ければ色々な箇條があるやうだけれども、これを概括すれば道德を尊重する、即ち道を重んじ徳を盛んにし、國民精神を涵養振作するのであると言はれるので、日本に於て一番大事なのは教である、その教を人の心に打込んで國民精神を守つて行くのが一番大切な事でありませぬ。

扱て斯う考へて來るといふと、教といふものは人が大事であり、國が大事である。教を人と國とから切離して、唯教だけ護る、宗旨だけを護る、お寺だけを護るといふやうなことは、それは洵に卑しい所の自己生存の爲にする動物的、唯物的の行動といふものになるのである。教は寺の爲に在るのではない、坊主の油揚げの爲に在るのではない、人の爲め、國の爲めだといふことになつて、始めて教の眞價が輝くのである。この位の事を知らなければ人間の普通の常識が無いのである。そんな事は別段學問をしなくとも、教

と云うたならば人を教ひ國を護るといふことは當然である。國と云うたならば人を可愛がり教を重んじなければならぬ、教もかまはぬ、人もかまはぬ、唯國が大事ぢやといふやうな、悪魔のやうなそんな國家が何の役に立つか。であるからしてさういふ意義をもつて、國民が能く諒解をするやうにしなければいまい。唯國家本位ぢやと言つたならば國が大事ぢや、教ナンといふものはどうでもかまはぬと云ひ、坊主は坊主で、自分の宗旨さへ盛んになつたならば國などはどうでもかまはぬ、「信教自由である、文句を言ふなら言うて見イ」といふやうなことで、各々増壁を築いて小さなもの、中に頭を突込むといふやうなことは實に愚な事である。もつと國民をして正しき觀念を發達せしめなければいぬ。

そこで私は極く新しい事實に就て實はこの講題を撰んだのである、そんな古いお話を爲す爲めではなかつた。唯以上申した事は原理原則として、國と人と教といふこの三者は互に相關聯して、縦に非ず横に非ず、三三が九つの關係を理解して、往いて第十番目に「ウン成程」といふことの概括したる思想を國民は持つべきものぢやといふことを原理原則としてお話ししたのである。それが缺けて見よ、こんな事が出来るか、こんな事が出来るといふ、そのお手本は今吾々の目の前に現はれて居る。この有様はこれ皆國は國、人は人、教は教と切れ／＼バラ／＼になつた結果は、ざまのない事夥しい、この有様ぢやといふことになるのである。それは宗教は腐つて人は人、教は教と云うて居るやうな宗教の中には、何の光をも見出す事は出来ない。國を忘れ教を忘れて居るやうな人の中には、唯蛆虫みたやうにグチャ／＼して居る者が残るのである。人を忘れ教を離れたやうな國は直ちに滅亡をしてしまふ所のものである。これは洵に觀易い事であつて、吾々の面前に展開されて居る所の事實である。

その事實の中の最も恐しい、又吾々日本國民の忘るべからざる事が昨今日本に現はれて居るのである。それは何であるか、事は昨年十二月二十七日東京虎の門に起つた申すも長多い事件であるが、その犯罪者を裁く爲に開かれた公判といふものは、この二三日前に大審院の第一號法廷に於て二日間に亘つて開かれたのである。一般には傍聴を禁止せられたけれども、私共は特別にその公判廷に於てこれを聴く事を得たのである。その事の内容は今茲にお話するものごとく考へるけれども、それに就て、この事實の中から國民が大に考へなければならぬことがある、又政治家も大に考へなければならぬ事があらうと思ふ。

彼の難波大助といふ者は本年二十六歳であるが、十九歳の年までは勤王愛國の青年であつたのである。その親難波作之進と稱する者は昨年あの事の起る頃までは衆議院議員に出て居つた。さりしてこれも勤王家であり嚴肅な性格の持主である。お祖父さんは有名な勤王家で、朝廷から御褒美まで戴いて居るといふやうな人である、兎に角田舎に於ける相當な素封家であるから先づ名門と言はれて居るのである。大助の二人の兄さんは既に大學を卒業して居るのである。さういふやうな家庭であつて、大正六年大助が十九歳の頃には、大阪の朝日新聞にデモクラシー運動の餘波を受けて、我が國體に反するやうな記事が時々掲げられた事があつた。これは諸君も御承知の事であるが、日本の新聞の中で大朝日新聞が悪い思想を宣傳するのではなからうかと言はれた事があつて、その記事に對して彼は憤慨をして、それを辯駁したやうな文章も書いて居る、さうして自分の郷里に於ては大朝日新聞は讀むべからずといふ不買同盟を作つて、熱心に朝日新聞の排斥運動をやつて居つた位な青年である。その外當時書いた文章には、天子様の有難いこと、日本の國が卓越して居ることなど、相當普通の人が言ふだけの事は、彼は文才があつて相當な

文章を書いて居る。然るにそれが數年ならずして、大正十二年の十二月に於ては彼の如き大逆の事を敢行するに至つたのである。この事實は我國歴史有つて以來未だ曾つてない事柄である。能く未曾有といふことは人が言ふけれども、それも事柄に依るのである。歴史有つて未だ曾つてないといふても、日本の臣民にして皇室に對して直接危害を加へるといふ行動を實行したといふことは、我國の歴史に於て實に曾つてない所の不祥事である。北條義時が逆臣であるとか平の將門が逆臣であるとかいふやうなことは、後からでもないのである。先年幸徳秋水等二十六人の大逆事件があつた、これは計畫は略々同じやうな目的であるけれども、併し陰謀中に未だ實行に移らぬ間に發覺をして、それ／＼の處刑を受けた。決して表面には國の歴史を潰すには至らなかつたのである。然るに今度の事はそのことを實行してしまつた。而もステツキ銃を持つて御車近く五尺も側に寄つて、さうして發砲をした。窓硝子の厚さは一分八厘といふことでありますが、それが破れて穴があいた、さうして彈丸は御車の中に落ちた譯であります。幸にして陛下の御玉體には何の恙あらせられなかつたけれども、併しその事柄が若し硝子窓でなかつたとしたらばどういふことであつたか、實に恐懼に堪へぬ事柄である、これは實に我國の美しい歴史を潰した事である、我國の歴史は「億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟ス」と仰せられた。億兆心を一にして世々厥の美を濟した中に、或る一つの斯の如き悲しい事實に依つてそこに汚點を印したのである。三千年の美しい歴史の中に、斯様な泥を塗つたものである。さうしてそれは現存せる各々六千萬の忠勇義烈なる國民全體の名譽を潰したる者である。又今日の國民の名譽を潰すのみならず、吾々の子孫に至つても日本の歴史を語らんとする

時、「大正十二年斯の如き事あり」といふことは將來の記録に永遠に貽る事になつて、この汚點は拭はうとしても拭ふ事の出来ないことをやり遂げたのである。恐しいとも何とも言ひ様のない事實である。

この事實に就て、前には左様な勤王の志を懐いて居つた青年が、數年後に於て我國に會つてあらざる所の大逆罪を取行するに至つたこの精神的變化といふものに就て、國民は大に考へなければならぬのである。それはどこからさういふことが起るか、能く世間では、日本は三千年の永き歴史を経て國民精神を鍛へ上げて居るが故に、容易にこの精神は變るものでないといふことを言つて居る。一應云へばさうであるけれども、この難波大助の如きは大正六年までは立派に一般日本人よりも熱心な位の忠君愛國の精神を持つて居つた、それが大正九年に至つては既にその精神が變化した、その間僅に兩三年にして彼は精神が激變した譯である。私は或る書物を読んで感じたことがあるが、悪思想の宣傳運動をする方の側に於ては、「ナニ、その國の歴史的に養成した國民精神などいふものは、それが容易に變らぬ」と云ふのは實に空糺みといふものである、これを誘惑するに道を以てし、煽動するに方法を以てするならば、十年を出でずして激變せしめ得るものである」といふことを彼等は揚言して居るのである。このことを讀んで私はこれは大に警戒をしなければならぬと思つて居る一人である。決して永い間養うて居つたからそれで安心だといふ譯にはいかぬ、無論日本全部の國民の精神が變るには相當な歲月を要するであらうけれども、その中から或る者が或る程度に變化して行くといふことは、さう長き歲月を要するものではないので、寧ろ人間の心は變化常なき有様のものであるからして、始終教を以てこれを訓化して、薄らがんとするに於ては又これを温めて行くといふ順序に行けば曲らないけれども、これを反對のものを以てした時に於ては

所謂心機一轉と言つて豹變する所の者が人間である。佛教の方で教へる所に依れば、人の心は十界を具へて居つて、一轉すれば佛が出、一轉すれば惡魔が出るといふことを常に申して居るのである。

それ故に大助は確に僅かの間にその精神が激變して、遂にあのやうな逆罪を犯すに至つた。これを或る人は説明して、彼の性質が惡かつたといふこと、彼の身體が弱かつたといふこと、それから彼の家庭が惡かつたといふことの三つに依つて、彼の精神が變じたと言つて居る、それも尤もな事である。無論氣質も悪いし、體質も悪いし、境遇事情も惡かつたに違ひないけれども、それだけに依つて決して彼が變化したものでない。それは遠い原因を成して居るけれども、直接變化したのはやはり彼が悪い書物を読み悪い話を聞いた、その惡思想の影響を受けたのである。言論と文章とを通して悪い思想を彼が受入れて行つたことに依つて、變化したのである。虎列刺病が傳染するには虎列刺病式の傳染方法がある、インフルエンザが傳染するにはインフルエンザ式の傳染方法がある、この頃流行る嗜眠病はごういふ式に傳染するか方法が分らないので、醫者が非常に心配をして居るのである。虎列刺病の傳染を防ぐには、斯ういふ所を注意さへすれば宜いといふことが分つて居るから、その通りに實行すれば決して傳染はしない。然らばこの悪い思想の傳染といふものは何から來るかといふこと、これは文章と言論に限つて居るのである。耳から色々な悪い話を聴く事と、それから眼で悪い文章を見る事とで傳染する。虎列刺病は耳や眼からは傳染しない、インフルエンザも眼から傳染するといふことはないのである。外の病氣は大抵口や便所から傳染をするけれども、この思想の傳染といふものは眼と耳とを通すのである。

そこで釋迦如來はこの事を早くから御注意になつて居るのであつて、人間の心は縁に隨つて變化するものである。恰も水晶の珠が太陽の縁を取れば火を生じ、月の縁を取れば水を生ずるといふが如く、人間は縁から恐しいものはない。極く哲學的に云へば、人そのものは善人でもなければ惡人でもない、本性は無定性である、無定性といふのは善とも惡とも名くべからざるものである。併し無定性であるが故に縁を尊ばなければならぬ。唯だ人といふものを茲に持出した時には、直ちにこれを善人とも惡人とも言ふことは出來ない。所が人が惡縁に取憑かれて居るとしたならばこの人間はごうなるかと云へば、もう疑もなく惡人になるといふことの言ひ得られるのである。その惡縁といふのは、悪い友達とか、悪い話を聴き、悪い本を読み、悪い方へ／＼と縁を取つて居るならば、その人間は即ち惡人になるのである。これに反して善縁を取つて居ればこの人は必ず善人になるのであるから、一番恐しいものは縁といふものである。人間は因縁を大切に考へなければならぬといふことを教へられた。法華經の「方便品」にある通り、

法は常に無性なり、佛種は縁より起ると知めず、是の故に一乘を説きたまふ。

善とか惡とかいふものは決して豫定されて居るものではない。難波大助なる者は善人でも惡人でもなかつたのである、所が家庭なり學校なり社會なりの關係から、彼は色々な善き縁を與へられたが爲に、勤王愛國の精神を維持して善人であつたのである。所がその後惡縁の方に取憑かれて悪い書物を見、悪い友達に逢つて、悪い話を聴いて、惡縁の爲に遂に惡人となつて大逆を敢行するに至つたのである。この思想の縁といふものは外ではない、即ち教に關係があるからして「是の故に一乘を説きたまふ」と云ふのである。「一乘」とは一乘の教といふことである。完全なる教に依つてのみ人は善くなるのである、誰でも善人とも惡人とも云へない。今日善人であつても他日惡人になるのである、今日惡人であつても他日善人になるの

である。あの人は善人か悪人かナンと言つても、何時のあの人であるかといふことを考へなければならぬ、孫兵衛なら孫兵衛といふ人は善人かと言つたならば「何年何月何日の何時の孫兵衛か」といふことを厳密に聽かなければ、唯孫兵衛が善人だ悪人だといふことの言へるものではない。誰でもさうである、何月何日何時は善人、何時は悪人といふことになつて行くのである。難波大助一人ではない、この事件の場合には非常に大きな問題であること故に、勤王といふ事と大逆といふ事だからこれは非常な變化だと思ふけれども、人間は時々刻々に左様に悪の方へ向き、善の方へ向きしてグラ／＼して居るものである。その中で一番大事なのは「是の故に一乗を説く」といふ教」といふものに在るのである。それ故に釋迦如來は、經濟の事よりも、法律の事よりも、戦争の事よりも、五十年の歲月を夜も晝も總てを捧じて一切經を説いて、人を教へて善化する、これに依つて人を善くし、世の中を善くし、國を善くし、總ての事に光を與へやうとして「一乗の教を説く」といふことを仰せられたのである。

だからして私は今度の大逆事件に就ても何を感ずるか。人各々所感が違ふといふやうなことを言ふ者もあるけれども、それが抑々間違つて居る、斯様な大きな事件に就て、大抵國民總ての者が考へることはさう違ふべき筈はない。やはり大事なのは人間の讀む書物や聽く言論である、悪い書物や悪い話の中に蔓れば、勤王の青年も大逆を敢行するに至る。だからして悪い書物や悪い言論を成べく少なくして、その反對に善き言論、善き書物を世の中に盛んにして行かなければ、遂に續々と斯様な不祥な事が起らぬとも云へないといふ所に眼醒めて、役人でも教育家でも、總てこの善き思想の宣傳、善き思想の發揚といふことに心を注いで行かなければならぬ。何故かと云へば彼難波大助と同じやうな身體を持ち、同じやうな性

質を持ち、同じやうな家庭に成長きくなつたからと言つても、彼が斯様な悪い思想に觸れなければ決して大逆を敢行すべきものではない。大和民族が數千年養ひ來つたこの國民精神の中には、特別な誘惑、特別な因縁がない限りに於ては、皇室に對して逆罪を敢行するといふやうな精神の湧いて來べきものではない。これは横から來た所の所謂共產主義であるとか、無政府主義であるとか、社會主義であるとかいふやうな、さういふ悪い思想の影響を受けることに依つて出るのである。茲に虎列刺病が起つたとする、この虎列刺病がどうして起つたか、「いや、始終不味い物を食つて居つたから」とか、「ツイ昨日の豆腐を食つたものだから」とか言ふけれども、それは眞の原因ではない、昨日煮た豆腐を食つたから腹は下痢だらうけれども、決して虎列刺病にはならない。それが虎列刺病になつたといふことは、この傳染系統といふしのを調べて見たならば、これはこの間向ふの線屋で買つた線が上海から來たもので、上海に虎列刺病が流行つて居つて線に虎列刺菌が着いて居つたのちやといふことを發見するのである。それを考へないで唯一養生が悪いものだから虎列刺病が出た」といふ風なことを言ふならば、それは洵に醫學上幼稚な者と言はなければならぬ。この難波大助が斯の如き逆罪を敢行するに至つたのは、それは身體の氣質だの家庭だのといふことは寧ろ軽い關係であつて、やはり悪い書物を讀んだり、悪い友達に交つて悪い思想を聽いたりする事、この忠君愛國の青年をして大逆人と變化せしめたのであるから、思想激變の恐るべきことに特に注意しなければならぬと思ふのである。

故に言葉を換へて言へば、國を大切に思ふならば人を導かなければならぬ、人を導くには教を大切にしなければならぬ。忠君愛國の熱誠なる所の軍人や國民は、唯鐵砲を以てのみ忠君愛國がやれると思つた

ら大間違である。我が民族の中にすらも、直ちに銃口を皇室に向ける者すら生じた今日は、唯鐵砲や飛行機のみを以て國が護れると思つて居るのは、智慧が廻り兼ねるといふものである。この大勢の人間を一々縛つて置く譯には行かない、行幸行啓の度毎に多くの軍隊を以て取巻くといふやうな事はかりしても居れないから、どこまでも先づ國家全體の教化を盛んにして、家庭に於ても親から兄弟から皆が責任を持つて家の息子が性質が悪いと言つたならば、それを精神的に教化する事に骨を折らなければいけない。どうも少し身體が悪くて病院へ入つて居るといふやうな人間は澤山居るのであるからして、精神の悪い人間を入れる大きな病院でも拵へて、さうして朝から晩まで精神的の教化を以てこれを導いて行くやうにしなければならぬ。この悪い息子や悪い人間が出来て居るのを何とも思つて居らぬといふことが、一番恐ろしい事である。難波大助の親作之進は、息子が斯ういふことを仕出来た爲に非常に耻ぢて、下男部屋に入つて食ふ物も食はずに瘦衰へて、髣髴々として謹慎して居るといふことを新聞で讀んだ時は、私は可哀相だと思つたけれども、この度公判廷に現はれた事實を見れば、彼作之進にも重大な責任があつたといふことを私は感ずるのである。大助が、今度の事を敢行することを書いて、さうしてその手紙の終に金を送つて呉れ、若し自分が云ふだけの金を送つて呉れるならば、こんな事は見合せても宜いといふことを書いて送つた。然るに父親は、これは唯金を食ふが爲にこんな事を言うて來たのぢやと思つて、その手紙を紙屑籠に叩き込んで金は送らなかつた。作之進が裁判所へ喚出されて取調を受けて居る際に、さういふ言ひ譯をして居るけれども、左様な事が書いてあつたとしたならば、唯金を送らないで知らぬ顔をして居るといふやうなことは、親としての責任を怠つて居る者である。驚いて自分が飛んで來て、さういふ量見ならばマア

金の事は兎に角家へ歸れと言つて、田舎へ連れて歸つて、少々ぐらゐ美味い物を食はしてもかまはぬから兎に角お前がさういふやうな考になつては大變だといふので、これを防止する事に努めなければならぬ筈である。それを僅かの金を惜んで「いや金の無心の爲に言うて來たのぢや」と聞き流した結果は、自分の子供をして左様な逆罪を敢行せしむるに至り、己れ自身も下男部屋に這入つて瘦衰へてしまはなければならぬといふ結果が來つたのである。

それと同じやうな事が世の中にはありはせぬか、「人の振り見て我が振り直せ」であるから、親でも兄弟でも左様な者が一人出たならば、實に先祖の名を辱しめ、子孫の不名誉となり、家族の不幸を來すのである。大助にも二人の妹があるけれども、斯ういふ事では譯も嫁に貰ひ手があるまい。又それが唯その家一軒の事ではない、その村といふものは、大助の出た村だと言つて人から指さしをされる。廣く云へば山口縣から出たといふので、今度の公判が開かれるに就て、山口縣人が洵に申譯がないと言つて、代表者を以て謝罪状を送つて來たといふ事が新聞にも出て居つたけれども、幾ら謝罪つても謝罪つたから勘辨してやるといふ譯には行かぬぢやないか。幾ら謝罪状を寄越したからといつて「マア、三遍も謝罪状を寄越したから勘辨してやらう」といふやうな話の出來る問題ではない。故に一人でもそんな者を生み出すといふ事はいけない。大體國民がぼんやりし過ぎて居るのである。私は先年幸徳秋水等の大逆事件のあつた時分からそのことを痛切に感じて居るのである。そんな者を生み出すといふことの責任は、親でも兄弟でも親類でも、それと交つて居つた者でも皆共同の責任を帯びなければならぬ。まるつきり知らぬ者は仕方がないけれども、譯某は時々變なことを言ひ居るとか、反抗的氣分を持つて居るとか、自暴を言ひ居るといふ



事があつたならば、これは他人事ではない、君國の爲にどのやうな努力と犠牲を拂つても、その改過遷善に努力しなければならぬものである。

その點の注意が今日は非常に缺けて居る。今日も佐藤中將、小原少將など、お話を仕合つた時に出たのであるけれども、昔は随分殿様のお通りといふ時分に、子供が飛出したり酔拂ひが飛出したりしたものである、さういふ間違があつたならば直ぐにお手打になるから、可哀相だといふので、どんな他人でも酔拂ひを見たならば自分の家へ連れて来て「お前は外へ出チャいかぬ」と言つて止めたものである。今度の事件の場合にも、大勢の者が殿下の行啓を拜觀に行つて居つた、假に巡查や憲兵がばんやりして居つた所が大勢の人が居つたに拘らず、大助が飛出してステッキ銃を出してさうして新様な事をやるのを知らぬ顔をして「ハ、ア、やり居るナ」といふやうな譯で見て居る程國民がどばけて居る。暫く経つてから氣が着いて、「已れッ」といふので飛んで行つて殿付けた時分には、もう事は終つてしまつて居るといふ譯で、餘程今日の國民はさういふ重大事件に對してどばけて居る。又近く東京でその裁判が開かれて居つても「傍聴に行かれ、ば俺も行くけれども、俺達を入れないやうな事ならどうでも宜い、勝手にしろ」といふやうな下らない感情に支配されて居る。斯ういふやうな大きい事實が大審院の公判廷に於て開かれて居る、我國の歴史を讀す實に遺憾千萬なことだと、お互が胸に浸込むやうに考へなければならぬ譯である。

どうかこれに鑑みて將來を誠めて行きたいものだと思ふのでありますが、私は今日のやうな有様では、政府に於ても本當の自覺がないやうに考へる、國民に於てもこれに備へる所の決心が足らぬと思ふ。故に甚だ不祥なる言を爲すやうであるけれども、このやうな有様で行つたならば、彼に似たやうな事が再び起

らぬといふことを何人も斷言するだけの自信はなからうと思ふ。其様な不安の状態に於て知らん顔をして居るといふのは不忠である。どうしても總ての力を盡して、もつと善き思想言論を盛んにして、詰らぬ新聞や、詰らぬ事を書くやうな雑誌などは世の中に存立することの出來ぬ位に、腐蝕の鞭を下さなければならぬ。然るに正義の議論をやる者は洵に衰へたる有様にして、力足らぬやうな状態である。悪い事を宣傳する者は意氣揚々として大道を闊歩して居るといふことを觀て、東京市のこの忠良なる國民が指をくわへて居るといふならば、江戸ツ子の顔色はどこに在るか。これは指導者が足りない所以もあらう、マア、出しやばらぬやうにといふやうなことを言うて居るからだけれども、もつとこれを本當に導いて、一人でも江戸の地に左様な不良な者は棲息を許さぬといふ立派な考をお互は持つて行かなければならぬ。

何故にこれが本當に行かぬかと云へば、政治家や役人が唯だ民権といふやうなことだけを考へて、警察官も裁判官も何か云へば民権々々と言つて遠慮して居る。それは民権は大事だけれども、餘りに民権の自由だのといふことを言はして置くが爲に、國民の中から至尊に對して危害を加へ奉るやうな事を生じた以上は、さういふ民権だの何だのと言つて居れるものではない、相當な取締をし、相當な警戒をするといふことは當然である。何も壓迫をする必要はない、國民が自衛的に互に注意するならば、さういふことはさせず済むのである。それは所謂「霜を履んで堅氷至る」であるから、勞働運動の先鋒に於ても革命歌などを歌うて「ア、革命は近づけり」……といふやうなことがあつたならば、勞働者自身が「そんなことを吾々に歌へといふやうな奴があるか」と言つて、それを指揮する者があつたならば勞働者自身が取つて擧げてさういふ奴を溝に叩き込んだら宜いのである。それを一緒になつて赤い旗を掲いで「ア、革命は近づ

けり」……ナンと言つてとばけた面をして居るといふことでどうするか、決してさういふことは許さるべきものではない。労働運動と革命運動との間には確然たる限界を存し「吾々の労働運動は正義の運動である、革命歌ナンといふものは不潔極まるものである、この神聖なる労働運動の中に革命歌などを歌へといふ奴はふざけ切つた奴であるから、ごやしてしまへ」といふ位の事は、労働者自身が言はなければならぬ、それが分らぬといふに至つては人間ではない。

要するに吾々の論ずる所は、少しも面倒な事を言うて居るのではない、一といふ字は一と讀めといふのと同じ事である、それが分らぬ者は馬鹿である。日本人がこの三千年の忠勇義烈の精神を鍛へたものは、そんな詰らない事の爲に誑かされるのか、運動を誤つたとか、手段に使つたといふやうなことの言へるものではない。既にこのやうな大逆罪人を出した以上は總ての點に注意警戒をして、飽までも嚴肅に、勤王愛國の大和民族の特色を彌が上にも發揮して行きたいものだと思はるべきであります。私は日蓮主義そのものが斯の如き主張に存することを信じて、この講題に就てお話を申上げた次第であります。(了)

本稿は前月號來掲載せる「國家の興隆と佛法の興隆」の續編なるも、又獨立して始終完整せる講演である、そして新年號の巻頭を飾るべきものと考慮したので、特に本號に載出せることにしました。

大僧正本多日生著 ◆ 四六版 全一冊 金壹圓五拾錢 送料拾二錢

# 綜合的佛教觀

著者多年大藏經全部を精研し、曾て大藏經要義を撰述し、今復此著あり、各宗の葛藤を斷破して大藏經に直面し、華嚴、阿含、方等、般若、法華、の五大部を講明し、善く佛教の眞面目を發揮し、其の綜合的興趣を示す、行文流暢何人も領解し得べし、佛教の書籍多しと雖も、未だ曾て此種の著書あらず、今や日本國民は其使命を自覺し、東洋の文明に歸らざるべからず、此時此著あり、此書讀まざるべからず。

東京市外品川妙國寺内  
大藏經要義刊行會

振替東京三一五九六番

名古屋市東區田代町城山

發行所  
取次所  
統編輯局

振替名古屋一〇八一九番

# 日蓮主義者より見たる無量義經

(第二十回)

井村日威

善男子。汝寧欲聞是經復有三十不思功德力不。大莊嚴菩薩言願樂欲聞。

(二九、六一八)

第五段「如來誠問」と第六段「答欲聞」である、此より下は十功德を明かされるのであるが、其を明かに就て、如來は聞かんと欲するやと問はれ、大莊嚴等の菩薩は聞き奉らんと欲すと答へた、此功德を明すことは、我等の信仰の目的を達成し得るものなるを具體的に標示したもので、我等は發心の最初に於て菩提を求めんと欲して信仰に志したものであるが故に、今は其信仰の實行に酬ひて與へらるゝ處のものを示したのである、我々の信仰は一氣呵成には充實しない、隨つて其與へらるゝものも一時には顯

はれない、行功を積むに隨つて報果は進んで行くのである、即ち十功德と分かつた、所以である、涅槃經には智慧と福德との二種能く法身を莊嚴すと説いてある、我等が信仰は智慧と福德との二莊嚴を得んが爲に外ならぬ、智慧莊嚴とは無始の無明が淨化して佛性現前し、佛智(一切智)、如來智(道種智)、自然智(一切種の三智)を以て法身を莊嚴するを謂ひ、福德莊嚴とは六波羅蜜の諸行を修し所有る福德を具足して能く法身を莊嚴するを謂ふ、我等は此二種の莊嚴を得ることが目的であるが、其を得る状態を説いたのが此十功德である、此十功德に分けたに就いては、我等が得る功德利益は、現在世と未來世とに通じて與へらるゝのであつて、法華經樂草喻品には「皆苦を離れ

て世間の樂安穩の樂及び涅槃の樂を得せしむ」と説き、又「現世安穩後生善處」とも説いて、現當二世の利益を得せしむるが佛教の利益であるが、現代佛教信者の多数が考へて居る御利益と言ふものは、聊か其趣を異にして居る、凡夫が我慾執着の爲に要求するものを満足せしむることは佛教では功德とは言はない、御利益と言ふことは出來ない、我慾を遠ざけ煩惱を超越して、身心の安樂處を求むる處に眞實の利益は與へらるゝのである、佛教信者たるものゝ考へ直さねばならぬ大事な點であらうと思ふ、今品にも十功德の第一に現在世に於ける利益を説いたが、煩惱的欲求に満足と與ふるとは説かない、却つて煩惱的欲求は消滅することが此經の功德なりと説いて居る處に大なる注意を要するのであるまいか、天台大師は法華經を信するものゝ位次を六即と立てられた、即は即身成佛の義で、法華經圓教の理想は一切衆生皆十界互具の當體なれば一人も残らず佛なりと言ひ

得ると言ふので即佛と云ふが、然し其佛であらねばならぬ一切衆生が現實には人間と生れ畜生と生れ種々異なる生活を營んで居るのは、各自の本性に背いたもので、其處に反省の必要があり信仰の必要が生ずる、理想の上では皆佛性あつて一味平等であるが、實際生活の上には差別が生じて居る處から「六即」と云ふたのである、六即の中の第一の理即と云ふのは、佛教に近寄らない總てのものを一括して云ふたので、夫れ等の持つて居る佛性は有つても顯はるゝ機會は無いから、事實上顯はし得ない、理論として存在を説くに過ぎぬから理の即身成佛で約めて理即と云ふのである、第二の名字即は佛法の名字に近いて少し計り佛教の事を聞き知つた位の程度で、丁度我等位の處の分齊である、これから進んで佛教を實行するに隨つて觀行(即相似即、分眞即)と爲り、最後に佛陀の證悟に到達した處を究竟即の位と云ふ、此六即と十功德とを配當して見ると次表の様になる。

得 益 圓教の位次 十功德



(六即の内理即は佛教に近寄らぬものなれば得益には入れない)  
 第一の淨心不思議力には慈心なきものに慈心を起さしめ、殺生を好むものには悲心を生じ憐愍の心を生ぜしめ、殺生を止むる等現在生活に於ける邪惡の念を去つて正道に就かしむることを説いたが故に、淨心不思議力と云はるゝのであるが、此は此經を信ずれば現在世活の上に斯る變化あることを擧げたのであるから、現在未來の中には現在であり、相對對待の中には相待益である、佛敎の名字を聞いて少し計り佛敎に近づいた分齊である故に、名字即に配當した、第二の義生第三の船師第四の王子第五の龍子第

六の治等不思議力は共に、煩悩を斷せず生死に出入して、而も濟生利物の淨業に従事して佛事を行しつゝあることは、未斷惑の位にして佛道を修行しつゝある觀行即相以即位の人に相當すること、考へらるゝ故に此二則に配當した、此二は共に未斷惑伏惑の位なるが故に退轉することもある故に絶待益なれども假益と稱するのである。第七の實封不思議力と第八の得忍第九の拔濟不思議力とは、第七の經文に半佛國の封を賞賜すると説かれてあることが、菩薩が一分の中道を證得して不退位に登つたことを意味するものと考へらるゝに依つて此より後の三を分眞即に配した、第十の登地不思議力は最後の功德として説かれてあり、最終の文に此人久しからずして阿耨菩提を成ずると云ふ文に依つて究竟即に配當して見たのである、此十功德を六即に配したことは、私に經文の大意に基いて試みた配當であるから、更に充分御研究の上に御考慮を煩はしたい、決定的の配當で無いことを一寸御斷して置きます。

# 法華經要文講義

## 如來神力品第二十一

如來神力品は特に大切な經であつて、即ち如來が十種の神力を現じて本化 上行等の菩薩に法華經の心髓を付囑するのであり、法華經の教相觀心に於てその解釋の特權を附與したるものでありますから之を別付囑と申して居るのであります。それは後の囑累品の一代一經の總付囑に對して撰んで申す言葉であります。經文には詳しく十種の神力が擧つてあります、今はその總てを引證しないので、特に大事なのは上行菩薩に對する別付囑の一節、それから尙ほ法華經の修行に就て五種の行を説き、殊に受持の大事が示されて居るのであります。

一五一、爾の時に千世界微塵等の菩薩

本 多 日 生

摩訶薩の地より涌出せる者、皆佛前に於て一心に合掌し尊顔を瞻仰して、佛に白して言さく、世尊よ、我等佛の滅後、世尊分身所在の國土滅度の處に於て、當に廣く此經を説くべし、所以は如何、我等も亦自らは眞淨の大法を得て、受持し、讀誦し、解説し、書寫して之を供養せんご欲す。

この所は地涌の菩薩が釋尊に對して一心に尊顔を瞻仰して申上げるのであります。それは自分達は、「佛の滅後、世尊分身所在の國土滅度の處に於て」如何なる場所に於ても當に廣くこの法華經を

説かうと思ひます。これは前の勸持品の時に逢化の菩薩が誓ひを立てたことがあり、涌出品の始めに陀方たほうの菩薩の誓ひを立てたことがあつたけれども、それは止められて「止みね善男子、汝等が此の經を護持せんことを須るじ」と言つて制止せられたのであるが、茲では愈々本化の菩薩がこの經を弘める所の發誓、即ち誓ひを發したのであります。それは何故かと言へば、我等自ら眞淨の大法を受持し、之を讀誦し、解説し、書寫して、之を供養しやうと思つて居るのでありますといふことを述べた。この「眞淨の大法」といふことはいろ／＼深い意味に解釋されて居りますが、要するに善量品に於て顯はれた所の本佛眞本の大事が眞淨の大法であります。

一五二、即時に諸天、虛空の中に於て  
 高聲に唱へて言さく、此の無量無邊百  
 千万億阿僧祇の世界を過ぎて國有り、

尼佛と名づけたてまつるのである。今は菩薩達の爲に大乘教の妙法蓮華經をお説きになつて居るのである。お前達は當に深心に隨喜すべし、釋尊が法華經をお説きになるといふことに就ては、皆な喜んで結構なことをやと賛成して喜ばなければならぬ。さうして「當に釋迦牟尼佛を禮拜し供養すべし」——釋迦如來が左様な娑婆世界のやうな所に出て、衆生濟度の爲に御苦勞なさつて居ること、さうして大乘の教をお説きになるに就て種々に御苦勞になつた譯であるからして、それを感謝しなければならぬと言つて、到る所に空中の聲があつたからして、その世界の大勢の人達は此の聲に驚いて何れも合掌して娑婆世界の方向をむいてこの言葉を作した、即ち南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と皆聲を掲げて釋尊を讚歎したのであります。これは南無釋迦牟尼佛といふことが二つ出て居りますけれども、幾度も唱へた譯であつて、何れも皆娑婆世界の方に向つて合

娑婆と名づく、是の中に佛有ます、釋迦牟尼と名づけたてまつる、今諸の菩薩摩訶薩の爲に、大乘經の妙法蓮華、教菩薩法、佛所護念と名くるを説きたまふ、汝等當に深心に隨喜すべし、亦當に釋迦牟尼佛を禮拜し供養すべし、彼の諸の衆生虛空の中の聲を聞き已つて、合掌して娑婆世界に向つて、是の如き言を作さく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と。

この所は十種神力の中の諸天が唱へて釋尊に歸依することを教へた文で、空中の聲として十方に響き亘つたのであります。十方世界の諸天が何れも娑婆世界の方を向いて、遠く離れた所に娑婆といふ國があつて、其處に佛がお居でになる、それを釋迦牟

掌禮拜したのであります。

この意味も十方法界の中に娑婆を中心としての思想である、釋尊を中心としての思想であつて、即ち阿彌陀經や樂師經のやうに、娑婆世界の衆生が西を向いたり東を向いたりすること違つて、十方の者が皆娑婆世界の方を向いて禮拜供養するといふことである。これは非常な大きな關係がある、中心思想といふものを除つてしまふと、絶対のことを研究する場合、必ず間違ひが起るものである。何れも同一の佛であるとか、同一の絶対であるとかいふことになつたならば、同じやうな事になつてしまふ、その場合に中心を明かにしなければならぬが、今は世界の中には娑婆世界、佛の中には釋迦牟尼佛を中心とすることを教へて居る、これが法華經の思想である。寶塔品の時分に十方の諸佛が集つて來ても、それは釋尊の分身であると言つて、その本跡が釋迦牟尼佛であるといふことを明かにして居るのである。

この南無釋迦牟尼佛といふことも、餘程大事な問題で、南無妙法蓮華經と三寶の中の法に就て歸依するも、南無釋迦牟尼佛と佛に就て歸依するも、これは三寶歸依の上からいうたならば同じものであるのではありません。であるから報恩鈔には「南無釋迦牟尼佛南無妙法蓮華經」と日蓮聖人は申して居るのであります。南無妙法蓮華經と言ひ現しても、それはやはり三寶に歸依することを法に依つて代表して居るのであります。この場合にも南無釋迦牟尼佛と申せば無論法華經に歸依することを含むので、佛と法とは離れるものではないのである。お釋迦様には歸依するけれども、法華經は信じないとか、法華經には歸依するけれどもお釋迦様は信じないとかいふやうなことは言ひ得られるものでない、それは無鐵砲な何も知らぬ者がいふことである。「法華經とは即ち釋迦牟尼佛なり」と日蓮聖人が言はれたが、結局さういふ意味になるのであつて、之を離すことは出来な

いものであります。  
一五二、爾の時に佛、上行等の菩薩大家に告げたまはく、諸佛の神力は是の如く無量無邊不可思議なり、若し我れ是の神力を以て無量無邊百千万億阿僧祇劫に於て、屬累の爲の故に、此の經の功德を説かんに猶盡すこと能はじ、要を以て之を言はば如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一切の祕要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此の經に於て宣示顯説す。  
これは如來が四句の要法に結んで、別付囑を説明せられた經文であります。併しこれもやはり佛が結んで四句の要法といふものを説かれたのであつて、何れも「如來」といふ言葉を冠してある、それが餘

程大なりな事である、如來の言葉があつて、そこに果分と言つて覺の上からその法が現れて來るのである、同じ真理と言つても果に至らざるものは、未だ十分の力が現はれて來ない、佛性と佛陀とは同じいと言つても、具して居るものと現はれて居るものとは、他面から言へば又大いに違ふものであります。因分可説果分不可説とも言ひ、傳教が「秀句十勝」といつて法華經の十箇條の勝れたことを擧げる場合にも「無間自説果分勝三」といつてこの經文を擧げて居る位であつて、果を明かにしないといふことは實に愚な論である。日蓮門下にも因に執して果を尊ばぬといふやうなことは譯のわからんことである。要するに佛敎は完全なる果に達せんとして發心修行が起るのである、有つて居るからそれで宜いといふならば、何も佛敎は要らない、皆本來有つて居る譯である、それを現はしてさうして果に達することが目的であります。それを原理論からして、平等である

とか不二であるとかいふ言葉に拘泥し過ぎるからして、それでも宜いやうに思ふのであるけれども、それは體に就て言ふのである。それ故に「六即」と申して、即を言へば平等であるけれども六を以て差別しなければならぬ、何れの所にか天然の彌勒、自然の釋迦あらんやと言つて、平等の一句に迷うてその儘に終るやうな者は馬鹿だといつてある。「鼠即々と鳴けども即の即たるを知らず」といふ言葉に嘲けられてある位のものである、即とか平等とかいふことを丸呑にして、それに引つかゝるやうな者は馬鹿者といふことになつて居る。現在の文明が人格平等といふことの爲に、非常な害毒を流して來るのも、やはり「鼠即々と鳴けども、即の即たるを知らず」の組なのであります。極端な階級を造つて無間に壓迫をするといふことも、無論善くないことに違ひないけれども、平等の理論に依つて秩序を破壊する運動ほど恐いものはないのであります。宗教でも道德

でも社會でも、それが爲に何時も恐い害毒を受けて居るのであります。日蓮聖人の禪天魔論は、全く平等の弊害に對つて痛撃を加へた言葉であります。

であるから今この上行菩薩に付囑せらるゝ所の大法は、果分勝の妙法である、「その時に佛、上行等の菩薩大衆に告げたまはく」諸佛の神力は今現はした如くに限り無き力を有つて居る、併し左様な力を以つてさうして非常な長い間かゝつて法華經の有難いことを説いても説き盡すことの出来ない程この教は結構な教である、それ故に詳しく説けば限り無いことであるから、その要點を結んで之を言はうならば如來の一切の所有の法乃至如來の一切の甚深の事のこの四箇の大事、それを纏めてこの法華經に於ては宣示無説したものである、この顯説するといふ點が大事なので、法華經の文の底に隠れて居る、文底秘沈ちやといふやうなことを言つて、愚論を骨頂してはいかんである、即ち文に依つて義を判すること

の出来るのが本門の特色ナンであります。であるから書量品はその經文に依つてこの精神をよく窺つて見なければならぬのであります。

この四句の要法は、何れも「如來の一切の」といふ句がついて居つて、覺の上から見たものであります。始めの「如來の一切の所有の法」といふのは、如來の覺られて居る所の法であつて、それは妙法と名けて居るのである、之を天台大師が五重妙法の中に於ては「名」を義といはれて居る、それ故に妙法蓮華經は譯の所有かといへば、釋迦如來の所有の法なのであります、その點が大事なのであります。妙法といふものは何處から來たか、自然に存在して居る眞理の名前ぢやといふやうな妙法ならば、それは逆門以下の妙法である、如來の一切の所有の法で、釋尊の覺を通じてそこに現はれて居ることが最も大事なものであります。それから「如來の一切の自在の神力」といふのはその如來の有つてござる所の不思議

の力である、それがこの經の「力用」であつて、妙法の力といつて見た所で文字の力ではない、如來の力である、佛力則ちそれが妙法の力である、妙法とは宇宙のその儘の眞理ではなくして、如來が覺り、如來が應用して居る所の如來の神力なのである。それから「如來の一切の秘要の藏」といふのは、これは「宗」といふことである、宗は要路と申して即ち一切の教の要點を指すので、それは佛教は因果を以て如來の秘要の藏としたものである、一切の教義は因果法より現はれて居る、さうして茲にあるのは本因本果の大事であつて、本因は即ち衆生本具の佛性である、本果はそれが現はれて居る所の本佛である、その本因本果は如何にも不思議な關係があつて、因果として前後はあるけれども、併しそれが決して時間を以て見るべきものでない、衆生の佛性が現はれて佛に成つたといふことになれば其處に始めがあるけれども、現はれたものは本覺のものであるから

窓を開けて月を見たのは夜明けであるけれども、その月は本來の月であつたが如くに、如何にもこの因果法を不思議に解釋せられて居るのである。因果同時ともいふて居る、大體妙法蓮華といふ經の表題を取つたのは、この因果同時といふ意味なのであつて即ち蓮と華といふものは因果である、蓮は果であり華は因である、さうして華果同時といつて、蓮華といふものは華と果が一緒になつて居る、華が咲いて居る時に蓮臺があつて、そこに實がすでに具はつて居る、その果の中に又葉がある、因中果あり果中因あり、因果同時の不思議の關係を説いてある、それで妙法蓮華經と言つて居る位である。これは十界互具の不思議な關係であります、その本因本果の事柄もこの經に於ては能く現はしたのである。要するに眞の佛性論と眞の佛陀論を明かにしたといふことなるのである。それから「如來の一切の甚深の事」といふのは實相を以て甚深の事といふと天台も言つ

て居りますが、これは宇宙観であり、宇宙の諸法の真相であり、要するに現象と本体との關係に於て、法華經は現象即實在論である、諸法即實相である、世間相常住であつて、洵に一時的現象のやうに見えるものに實在の意義を明かにして行つたのである。三世諸法悉く不思議の妙法ならざるものはないといふ一大原理を有つて居る、さういふ實相の真理をもこの經に於ては現はしたのである、要するに秘要の藏と甚深の事に於て佛性論と佛陀論と宇宙論の三つが現はれて居る、その前の自在の神力は佛の力であり、所有の法は佛の覺つて支配して居る所の教である、自然的の真理ではない、自然的の真理といふのは寧ろ甚深の事がそれである。斯様な意味に於て法華經に説いたその「教」といふものが之について來ることになるから、そこで名、用、體、宗、教といふこの五つのものが法華經に於ては明かになつて居るのである、これが即ち天台の五重支義

であります。いろく難かしくいふけれども、何時も私が申して居る所の妙法の言葉と、釋尊との關係が明かにさへなれば、この事は能く判るのである。さうして一々に「如來の一切の」といふ字の冠らされて居る所に特に注意しなければならぬのであります。傳教は之を「果分の一切の」「果分の一切の」といふ風に言ふて居りますが、前に申す通り一旦覺を通じて來なければならぬ譯であります。斯様に四句の要法に結んで之を上行菩薩に付屬するのであります、之を上行菩薩が受けて、さうして時をばかつて末法に出て日蓮聖人となつたといふことに解釋されて居る譯であります。

大僧正 本多日生師著  
**自我偈講義** 一部金貳拾陸圓貳錢 十部特價金壹圓(稅共)  
名古屋市東區田代町城山  
第四十二版出來 統一編輯局  
振替名古屋一〇八一九

### 價值見直しの時代(二)

文學士 武田顯龍

#### 一、自然と人類との闘争

人類進歩の過程を振り返つて追つて見ると人類文化の進歩は人類が自然と闘争を擧げた結果であるといふことが出来ようと思ふ。例へば着物や住居の發展にしても人に依つて着物は南洋の一部の土人の間に居る様に裸體でありながら然も陰部だけは何物かを以て覆ひ隠す様に人間の羞恥感情が土台になつて發達したものであり住所は生物相互間に於て弱肉強食の殺傷が行はれるから弱者は強者の侵略を防禦する爲に住居を作り是が發達したものだといふ説をなすものがあるが一面是等の事が着物及び住居作成の理由であつたかも知れぬが常識的に考へて見て着物は寒暑を防ぐ爲に住居は風雨を防ぐと云ふ事が大なる理由をなし是から發達したものだといふことは誰しも異論のない事と思ふ即ち人類が自然と闘争の結果の産物であると思得られるのである。汽車汽船電話電話航機飛行機或は電氣等は等科學文明殊に自然科學の發達に因つて出

來上つた文化的機械並に設備は皆人類が自然と闘争の結果擧げた凱歌の表はれである。續て形而上學の方を見るに茫漠たる大自然と僅に五尺の空間を占むるに足らざる自分とを比較して驚異の目を以て自然を見た人類、永世に變へて變らぬ雪山の姿、恒久に流れ盡きせぬ涸河の水、此の自然の壽命と果敢なき五十年の己が生命とを比較した時、空間的に際涯なき大自然時間的に無窮なる大自然、唯々自然と唯々大自然と出と置歌の聲を放つたのは古き人類であり今の人類である、自然證の叫びは希臘文明の搖籃となつたが驚異の餘り發した自然讃歌の聲は果敢なき自個を顧みて發する悲哀の情を消すべくもない、自然と自個とを相對の境地に陥れた時對立の考が勃然と起つた。即ち印度文明アケマン文明の搖籃は此處に在る。

哲學思潮に於て諸法即ち森羅萬象の實在を疑つた懷疑派は一朝の榮と亡びて一元的の實在論の繁榮を來たし進んで「人は萬物の尺度

なり」と叫び震盪の中に法界を容れ一念の内に三千を包むと叫んで自然の實在を自個の一念自個の實在に依存せしめ來つたと云ふ事は人類が自然と闘争に於ける時間である。

始め人類は大山を望むにつけ大河を眺むるにつけ大水を見るにつけて其の偉大さに打たれ一種敬虔の心を生じて是を崇拜した自然崇拜は即ち是である、然るに大暴風雨大雷雨等を經驗して自然堂に自然現象の裏に超人間的の力ありとし是を神として崇拜したが次第に自個を自然と對立させるに及んで自個の靈性即ち自個内に神性を認めると同様に他の總ての物にも神性を認めざるを得ざるに至りて此處に汎神論を生ずるに至つた、汎神論では宗教意識に訴ふる時甚だ不便が多いので人間をも包んで總ての森羅萬象の根元をなして居り然も理想の窮極であるとなす一神論を生じたが已以外に一神を認めて居ては尙自然に打ち勝つたといふ云へない即ち人類絕對と云ふ優越感に浸るわけにはゆかない、其處で客觀的に認めた神をば自個の心内に持ち來たして人類絕對を誇らんとする考が起つて來た、中世の教權反抗運動は斯ふした思想の變形的表現とも見られるであらう又人格實在の汎神論統一



神の認識は新ふした思想の結論とも見られるであらう。斯の如く考へ来るる哲學の認識論的方面や宗教の神學的方面は自然科學と同様に其の圖の形式に間接直接消極的の相違こそあれ等しく自然と人類との争闘の結果であり其の發達は争闘の過程に在ると見て敢て差し固へば無からうと思ふのである。

## 二、自然科學科學の發達

斯の如く吾人人類は一連一連日々夜々に自然との争闘を持續し其の戦争の狀態即ち自然征服の方法及び程度の相違に依つて生活意識の上に又は人生觀道德觀社會觀等思想様態の上に夫れ夫れ相違を來たすこと當然過ぎる程當然と云はればならぬ。

自然科學の發達は空間に於ける距離を著しく短縮して人類相互交通往復の重大なる障害を除いたから彼我の交通は盛んとなり數千里を距つる人類相互間に於て居ながら思想の交換が出來珠に印刷術の發達につれて一舉にして十七億人類に己が思想を互に知らしむることが出来る様になつたから各自の考へ方が自然と變つて來た。殊に蒸機機の發明は個人工業生産を排して組織的なる大規模の生産工業方法を採用するの條件なきに至らしめた

即ち産業革命を惹き起した結果工業都市の發達となり是が都合地に於ける文化的施設と相俟つて人口の都市集注と現はれ或は資本主義社會制度の出現と云ふことになつた。

科學文明の發達と云ふ羊飼ひに依つて進歩せる機械と云ふ一片の肉は投げられた。若か草類へ立つ南向きの牧場に數頭の眼がしきくもはつと開いて戯れて居た小羊は先きを争つて肉片へと突進した、或者は食ひ或者は索め或る者は飢へ此處に争奪戦の出現となり修羅場と暮は轉じた。今迄は柔順其の者であつた小羊も首に鎖は代へられない、怒號咆哮の叫びを揚げて我にパンを與へよと嘯く様になつた。是れ小にしては現時の社會問題の實狀であり大にしては帝國主義衝突の國際間の實狀であらう。

人類が自然を征服せんとして細分出した科學文明の發達は俱相検査の道具と化して人類滅亡と云ふ禍害しなかつた事業を惹き起した。果然唯物科學文明に對する兇阻は印度の聖者タゴールの銀鈴の様な聲を通して東の空に將た洋を越えて西の海に響けられた唯物的科學文明の表現とも云ふべき現代社會制度に對する反逆の手はガンダイの赤協同主義とな

つて表はれた。然し今後の經濟元則は物を最も安くして人を最も高からしめる事であると云つて自然科學の發達を濫取する聲は野に山に満ちて居る。

ヘンを置いて耳を傾ければ九十九里野頭波高く寄つて返す波の音は常恒不斷に岸を洗つて居る。而も東海岸の岸邊砂濱は日一日と東の方へ海を埋めて行く。人類が自然に拮抗して爲とつある科學文明の發達を九十九里野頭の波頭であると誰か評し得ないであらうか。

春草の程靜寂を友として居た小羊の隣は平和其の者であつたが群羊喧嘩の程一塊の肉片を争ふ小羊の隣は争鬪其者である、科學文明の發達しなかつた時代訪ふものとは松風村雨のみであつた時代人心と空を仰げば飛行機の轟音轟しく地を望めば自動車は砂煙あがる時代人心と自ら相違があり幾つての物に對する價値の見直しが行はれるのは當然である、昔は不夜城と云へば江戸の花吉原とのみ思つて居たが今は箱根八里の山奥東海道は駿河驛富士新報社一帶に是を認めることが出来る、越後の親知らず子知らずは今は寝台車に眠つて何時の間にか通つて終ふが銀座街頭電車の交叉点や日比谷の電車の交叉点など眞の親知

らず子知らずであつて此方側から彼方側へ通り抜ける時など親子の情誼を思ふ餘地もなく身を以て通り抜けると云ふ實狀で、是等は地理上に於ける價値の見直し價値の顛倒であるいざ如何様に價値の見直しが行はれつゝあるか氣付くまきに列記し批評して見様と思ふ。

## 三、人を見たら泥棒と思へる時代

昔から東洋に在つては流る世間に鬼はないと見て居たのに西洋に在つては人間を見るに人を見たら泥棒と思へると云ふ見方である。即ち東洋に於ては菊子の如き人の性は悪なりと云ふ泥棒の見方も有つたけれども是は寧ろ例外であつて孟子の如き人の性は善なりと見更に彼は四端の説を説いて剛毅の心を示し徹頭徹尾人の性質は本來は善良なのであつて人を傷けたり人の物を盗んだり邪惡邪惡を恣にするると云ふ様なことなく慈悲の心正義の心を持つて居るものだと云つた。佛教に於ても悉有佛性と説いて人の本心は淨へ流る月の様に正義の光と慈悲の輝きに満ちてるものだが過去の生命以來後天的性とも云ふべき程深く浸み込んで居る慾望煩惱と云ふ雲に覆はれて居るのだが法性の水が菩提の水となる様に我等の

本性とは佛とは全然同一であつて迷へる我等の本性の水を知説修行の信得で冷却させれば悟りの佛と氷るのであつて其の本体に於ては迷悟共に一体であつて唯曇きの上に迷悟の差別があるのみである。即ち煩惱の水菩提の水なるので煩惱の水を離れて別に菩提の水があるわけではない従て生死即涅槃であると法華經に見て來るのである。日蓮主義は人間の性を見る場合にも佛界縁起から見來るから迷者其とも云ふべき我等を見るに佛子なりと斷定して絕對善其の者である佛の子であるとなすのであるから我等の本性は絕對善其の者だが佛に流るる様に過去の生命以來無明煩惱の流が附着して居るから絕對善の佛子の本領が現はれないで信仰と云ふ酒と修行菩薩行と云ふ桶の中へ流棒たる我等を入れば流は淨化され變じて甘棒となる様に我等は佛子の本領を開發して佛性は此處に顯露して子として佛の家督を相続すると説くのである即ち徹上徹下性は善なり流る世間に鬼は無しと見るのである。他の大乘佛教は日蓮主義の見方とは大分異つて居るが然し大体に於て悉有佛性と云ふ点に於ては流る世間に鬼は無しと云ふ見方であると云つて真からう。

基督教では人は罪の子であると云ふ見方である即ち原人アダム、イブと云ふ男女は神に依つて禁慾せられたエテンの園の果物を純に誘はるまきに是を食べたが此の果物は善惡正邪の標準となり是を判斷すべき智慧の果物であつて是を食べて以來人は善惡正邪を判斷する能力を失つた、斯る大罪を犯したアダムイブが今に正邪善惡の標準を失ふて罪に罪を重ねたアダム、イブの子孫たる人類は永久に罪の子であり罪惡であるとなすので此の点では基督教は迷悟二元論の見方であり日蓮主義は一元論の見方であり基督教は性は惡なりと見て人を見たら泥棒と思へると云ふ無明縁起論の見方である。

而して基督教文明は西洋文明の根本をなし佛教文明即ち東洋文明の精神をなすが故に西洋人は人を見たら泥棒と思へると云ふ主義であり東洋は流る世間に鬼はないと見るのである。従て西洋人は人に對して警戒すること嚴重であるから禮儀作法迄右の利き腕を握り合ひ互に穴のあく程注視し合ひそして左の手はいざと云ふ時の用意の爲に握り拳を握めて居るのであるが東洋人殊に日本人は他人も我と同様お互に善良なりと見るから他人に對し

て警戒するの必要を認めないから無警戒の姿勢で頭を下げ先方の様子などは少しも見ずに従容平然として辭儀挨拶をするのである。

西洋では偏面対面人皆を泥棒と思へど云ふのであるから泥棒の中に棲息するには自我を出來得る限り主張し絶ての事に對して俺が又俺を又俺にと云はなければ生存競争に敗者とならざるを得ない、其れ故絶ての事に對してナンを主張する。ナンの主張は即ち權利の主張である、從てナンとナンとの衝突が起り權利と權利との結合はせが起る故此の衝突結合はせを牽制する爲に社會奉仕と云ふ或は義務と云ふ道徳觀念をナンと權利の裏に附帶させて社會の秩序を保ち統制を調停ならしめんとして居るのである、之に反して東洋では偏面対面皆善なりと見てくるから自分が愉快に暮せるのは他人のお蔭である自分の生存は人と云ふ字が示す様に他人あればこそ生存出來るのだと思ふから此處に無恩と云ふ考が強く起つて來る、從つて報恩の方法としては犠牲と云ふ精神が高揚され社會愛報恩犠牲性と云ふ道徳が行はれて來たのである。

然るに西洋文化の輸入と共に東洋文明の精神たる人の見方並に社會愛報恩犠牲性と云ふ道

すが性は善なり流る世間に鬼は無いと云ふ見方に立ち歸り彼等の物見方である人を見たら泥棒と思へど云ふ根本的誤謬を一掃して大變換するにあらずんば百の軍縮會議を開か

# 記事

## 新年第一報

大正十四年の時頭に報導すべき宗運隆昌の吉報は、九州の大牟田に信徒原田儀市氏から敷地三百坪と基本財産六百坪との寄附をうけて新寺本孝寺の創設せられた事と、名古屋の常樂寺で前年の懸案であつた教化運動と社會事業の爲め理想の會館がいよいよ建設される事になつた、そして同寺の資産から産れ出つべき巨額の宣傳費は近く活用の域に入らんさしつゝある事と、札幌、神戸、釜山、吳等に或は本堂、或は教會堂の新設されんとしつゝある事とである。詳細は追て記載する。

## 立正結社第一回總會

十一月二十日午後一時より統一園に於て立

徳は次第に價値を低下せしめられて西洋人と同じ様に人を見たら泥棒と思へど云ふ自我の主張が高張され絶てを權利と義務とで片付けて行かうと云ふ様に此の邊では低く價値づけられて顧みられなかつたものが今日は非常に高く價値づけられる様になつたのである。此處に絶ての社會問題が根ざして居り社會の紛亂は多くは此處から發して我等の眼前に多くの悲劇喜劇を展開して居るのである。

讀者諸君、原稿を綴つて居る私は合ひ間合間に友人の實家安藤遊君から朝鮮産だと云つて送つて呉れた栗の實を安藤君に、又ゆつて呉れた老いた母に感謝しながら食べて居るのであります、先刻から栗を食べて居るの一番美味しそうな分から選つて食べて居ましたが一番美味を選ぶ時一番美味なやつと思つて選つて食べた私は數十個の栗の實を皆全部一番美味だと思つて食べてしまつた、若し私が反對に一番美味なやつから食べて漸次美味なのを食べてよと思つて一個一個を選ぶ時一番美味なやつを選んで行つたなら最後迄一番美味なやつを食へることでありませう。一番美味だと思つて食べたのは私であり一番美味だと思つて食へるのも私であります、食べられる栗は

うとも千の國際聯盟を作らうとも永久に平和の女神は訪れないと斷言して止まないのであります (未完)

一皿の栗であつて變化はないのに美味と惡味と二つの反對に味ひの變るのには其を感ずる私の心からです、絶ての事柄皆な同様で要は心の問題であります、紅の花に蔭は紫と聯想して眞理を連想したのも人の心であれば紅の花を豊饒なる肉體と聯想して劣惡を恣にし罪を犯すに至つたのも人の心である、要は心の問題であると重ねて申します、栗の實食へるに一番美味であつたと愉快に舌鼓を打つて暮すか幸福なる人生か其とも反對に一番美味であつたと泣顔して不愉快に暮すが幸福なる人生か云はずして明であつて諸君の絶ては前者を採ることでありませう。東洋文明は日蓮主義は一番美味であつたと感じて愉快に人生の幸福を味はふとする主義であり西洋文明基督教文明は一番美味であつたと泣顔作つて不愉快に人生を送らうとする主義である、即ち流る世間に鬼は無い人の性は善である一番美味であつたと感ずるのは法華經日蓮主義の物の見方であつて絶ての物の善なる方面を見て是を價値づけ是を活かして働かす處に法華經開顯主義の主張があり日蓮主義の特長が存するのである。

今や世界は口に平和の愛好を唱ふるを常と

## 社會教化講習會

十一月十七日から全月廿一日迄五日間東京牛込常樂寺で常樂寺並に立正結社本部主催で社會教化講習會が開かれた。布教師並に宗務廳で選抜した人々を招待したので、遠くは滿洲營口の岡松師、釜山の横山師等、全國から集まつた者四十餘名、然も無料で一般の聽講を許したから、午前部に會する者二百餘名午後部に會する者連日連夜五百餘名、誠に盛會であつて、法益が非常に多かつた。講師諸師は左の通りである。

- 法華經開結二經の講義 井村日成僧正
- 佛教の思想大系 本多日生大僧正
- 近世歐洲の宗教思潮 矢吹慶輝博士
- 現代思想批判 深作安文博士
- 防貧及救貧制度 小島内務省囑托
- 辯論學概論 加藤晴堂先生
- 小作問題の眞況討議 坂田農商務小作官

正結社第壹回の總會が開かれた、當日の來會者は僧俗で約五百名、各地方より熱心な社員が多數参加せられたのは、社運隆昌の彩色であつた。「開會宣言」井村理事。「事務報告」井村理事。右決了の後總裁本多大僧正の「時を経て愈輝く」の題下に譯乎として約二時間に亘たる長廣舌あり、滿堂轟然として慈雨に潤ひ立正大師諷誦宣下の記念として設立した本結社は、國家多難の現代に於て異體同心に立正安國の聖意に奉答すべき大覺悟を參聽者の心田に植付られた。午後五時玄經三唱、日出度閉會を告ぐ、參聽者一同へ總裁祝下揮毫の屬子を記念として贈呈した。

立正結社本部現在役員左の如くである。  
總 裁 本多日生現下  
理事長 笹川日堂

開期中布教師並に選抜の人達は各自擔任の教勢に就て相互に報告し合ひ、尙ほ宗務當局をも加へて打ち合はす處があり、善策に輝いて歸られた。定めて願本教團教勢の擴張に一時期を劃することであらう。唯我々準備に又世話焼きに當つた者としては、帝都の復興未だ成らざる爲に諸事不行届きであつたに拘らず誠心奮めて來會者から感謝されたことを恥しく思ふ。終りに臨んで第一布教區布教師並に青年僧員、及び千葉縣の篤信者家徳けい千夫人に感謝の意を表します。(武田生)

## 千葉縣大法會

千葉縣年中行事の一なる縣下聯合大法會は十一月一日より三日間結ヶ崎町妙經寺に開催された。當地は昨年の震害地でもあり本年の早害も尠くない。隨つて「大法會は結構の仕事に相違ないが此際さんなものか」と心配する世人もあつた。然し主催者は世評を憂へて進行した。大法會は決してお祭騒ぎではない。祖先の靈を祭り靈災殞死の精靈等を叩ふは生者の義務であり、且つ紛亂の思想界に立ち、天災並び起つて生活の安定を望はれたる現代人に慰安と活力を與ふ者は宗教力

にあらねばならん。大法會は此二者の完成を

主眼とする大事業であるからである。君津郡小櫃村長谷川は會場より四里以上も隔て居る此地の特色者田邊氏、駒氏は各々尺二寸角の大塔婆を寄附された。然も長谷川の檀信徒は一致團結で木挽や山田じやら運搬に至るまで援助された。誠に美事と云はねばならん。

一は大震災殞死の精靈の爲め、一は本宗檀信徒各家先祖並に戦病死者の追祐に供した。

初日は松川監督布教師、中日は井村宗務總監後日は兼山老人の大導師の下に普學天童大法會は嚴肅に修行された。尙大法會に一異彩を放つたのは房総日蓮主義布教團の應援であつた。十月廿一日正午一隊は三分され、一は武田團長指揮下に水更津町に、一は小島、木村、海老澤、山田、堀江等の青年布教員がメ

ダモン自轉車隊を組織して五芳町、八幡町村田方面に活躍せられた。結ヶ崎町の傳道堂は云はずもなである。初日たる十一月一日午前十時早くも栗原布教師の開會の辭に講演は開始した。講演と法要交互に晝夜進行來會者をしてす時の餘暇も興へず理想的に實行し得たるは主催者の誇とし又欣快に堪へぬ次第である。最初大法會をお祭騒ぎと懸念された人

々も感謝の語を發して居つたが儘かに結果のあつた事を信じて疑はない。三日間の講師と講師は「感激」の島布教師。「心性の開發」飯川監督布教師。「日蓮主義の特色」木村布教師。「我此土安穩 秋葉日敬師。「國民生活の基準」海老澤布教師。「根をこめて」川崎教務部長。「立正大師を想ふ」木村令快師。「能教世間苦」井村宗務總監。「國民反省の秋」草切布教師。「廻りますから御注意」武田社會部長等であるが、會務新布教家手代木師の統一節日蓮上人傳は三日間に亘り地方人をして趣味と共に大いに感謝を深からしむる處があつた。三日午後四時秋葉布教師の開會辭を以て目出度終了を遂げた。

大法會に對し餘に應援せられた諸兄弟に感謝する。(主催者)

妹尾放牛畫伯の

### 日蓮聖人御畫像を紹介す

世に日蓮聖人の御像と稱するものは數多あつて、いづれも尊いものではあるけれども、これぞといつて吾人の脚跡を踏るほどの靈活な相續と技巧の精妙なものに接したことがない、唯一つ明治時代の大彫刻家竹内久一氏の

みはその強烈な信念と卓越せる技能とに依つて、吾人の渴望を醫するだけの日蓮聖人御像を製作せられたのであつた。

然るに近年、自分と同性の畫家で、しかも熱烈な信仰を持つて多年日蓮聖人御像の研究に没頭して居る人が、同じ京の町に住んで居ると聞いて是非一度逢つて見たいと思ふたところ偶然にも知人某氏の宅で對面した。

畫伯の性は妹尾、號を放牛といつて、生國も自分と同じ岡山縣であるので、まるで親類が一人できたやうな気持ちで其後も頻りに相往復して居るうちに、同君が久しく苦心研究して拜寫しつゝある日蓮聖人御像の草稿なるものを見ることも度々あつた。また同君の日蓮聖人御像に就ての意見も抱負もきいた、其の

草稿と稱するものは自分の見ただけでも幾十枚有つたが、或は水鏡の御像に似たもの、或は妙覺寺のに似たもの、或は竹内久一氏のを髣髴として思はせるもの、又は全然同君の獨創に成つたもの、正實剛直、折伏柔和の諸相、いづれも苦心研究の跡の歴然たるもののみであつたが、其の中で最も自分を感服させたものが一つあつた。

それは同氏に於ても會心の作であつて、同氏は其の草稿が出来た時に、幾度も其の草稿に向つて禮拜したのだといふ、全然同氏の獨創的な容貌ではあるが、さりとして古來の傳統の御像の約束を無視してではなく、威ありと雖も猛からず、敬すべく親むべき圓滿具足の妙相、加ふるに多年鍛へ上げた洗練せる

技巧の味は、思はず自分をして隨筆讚歎の情を禁する能はざらしめた。現在全國に亘つて自分の拜した日蓮聖人御像のうちで、これこそ吾らの主師親として想像し得る日蓮上人の御容貌に最も近い傑作として今後同氏が萬事を放棄して、聖人の御像拜寫に一生の全力を傾注し、一體でも多く拜寫し、一幅でも多く廣布して、祖道復古の願海に裨さすことを勤めることにも、茲に廣く各位に紹介する次第である。

大正十三年初秋

京都深草の里にて

妹尾

朔

## 朝鮮釜山顯本會堂建立淨財勸募之辭

人心思想の如何によりて強大なる國家の基礎も一朝にして倒壊し廣大なる世界の平和も之が爲に擾亂せられ光輝ある文明の建設得て望むべからず。斯の如き事實歴々として吾人の面前に展開し來たる。大聖釋尊は曰く「毒蛇猛虎よりも恐るべきは惡智識なり」聖者日蓮は曰く「國土亂れん時は鬼神亂る鬼神亂るが故に萬民亂る」と然るに今や舉世陷々として懷疑の弊に陥り精神の力を失ひ物慾の追求に疲れて暗黒の野に彷徨し一點の清光を認め得ざるもの多きを致せり。今にして風教の作振する事無くば浮華輕佻の風一世に瀰漫し民

心益々動搖國力漸く空虚を來し復た如何ともすべからず。殊に朝鮮は我日本の併合以來爰に拾有餘年、着々教育と産業の開發に顯著なる成果を見るも、末だ宗教の方面に於ては其の緒を見ず、之が爲に下層鮮民の多くは赤化の思想に煽動されて遂に不逞の漢を見るに至る。苟くも心を邦家の前途に繋ぐる者豈協心戮力以て之が救援に努めざるべからず。其の救援の術は日蓮主義の思想を以てせずば斷じて不可能也。不肖横山惠正過る大正四年拾月海外宣傳を志し單身渡鮮を決行す、想へば六百年の昔國士日持上人は聖者日蓮の遺教を奉して海外宣傳の雄圖を懷き單身北海の波を蹴つて靈嶺北滿の天地に世界統一の大義を獅子吼せられしを回想する生等の血は自ら湧出で、聖戰の陣頭に參加するの光榮を喜び翌大正五年二月十一日日蓮鑽仰天晴地明會を設立し大正十一年五月顯本布教所を設置して日蓮主義の宣傳に微力を致す、其間あらゆる困苦多々なるも漸くその教化の實現れ爰に今夏釜山中樞の位置に會堂建築敷地として九拾壹坪の土地を購入し更に會堂建立の計畫も己に成り來春二月より工事に着手せんとす、希くば隨喜の士女この卒業を贊助し淨財を喜捨し以て發願を成就せられん事を。

大正十二年十二月

發願人

- 横山惠正 永見京造 江川傳太郎
- 熊本新 別府禮吉 矢頭伊吉
- 吉川義治 上西收五郎

寄附金勸募要項

- 一、敷地九拾壹坪 金九千五百圓
- 一、會堂五拾六坪五合 金八千九百六拾圓(棟瓦健)
- 一、庭徑貳拾八坪七合五勺 金千九百七拾圓(棟瓦健)

- 一、工事着手 大正十四年二月
- 一、工事完成 大正十四年七月朔
- 一、寄附金は朝鮮釜山大廳町顯本布教所へ申込及納入願上候。

喪中ニ付年始失禮候

本多日生

謹賀新年

顯本法華宗宗務廳

- 井村顯日 武田英照 川崎英龍 大森日榮 中野信良

謹賀新年

大正十四年一月元旦

統一編輯局 同人一同

總本山妙滿寺

- 賀正
- 本山部長 原田日勇
  - 社會部主任 有田宏道
  - 布教部主任 土持良達
  - 法要部主任 豊田通泰
  - 事務所詰 三好信道
  - 全 松井會雄

喪中に付年末年始の禮を飲き候

統一編輯局ニテ 國友日斌

謹賀新年

立正結社本部

總裁 大僧正 本多 笹川 多  
理事 長 井川 榮 堂 生  
常務理事 大井 森 成  
同(會計主任) 山岡 昭  
理事 中國 友 日 日 日 日  
同 原 田 日 日 日 日  
同 武 田 顯 日 日 日 日  
同 川 崎 英 照

恭賀新禧 財團法人 自慶會

賀正 自慶會理事 安川 繁種

謹賀新年 財團法人 名古屋自慶會

謹賀新年

總本山妙滿寺 教學財團本部

總裁 本多 日 生  
理事長 中村 彌 之 祐  
理事 市橋 昌 晴  
全 西村 吉 右 衛 門  
全 小野 善 吉  
全 和井 田 寬 冉  
全 金井 田 孝 碩  
全 福田 光 正 敏  
外 役員 一 同

賀正

顯本健兒會

會長 有田 宏 道  
副會長 土持 良 達  
主事 豐田 通 泰  
全 高岡 義 雄  
全 山田 篤 三 郎

謹賀新年 統一團名古屋支部 妙教婦人會



恭祝新年 正法興立 皇道隆昌 萬民安堵

我等同人は茲に大正十四年の元旦を迎へ立正の光明に浴し立正の希望に充ち向上の一路を辿りて皆歸妙法の志願を達成せんとす。此の意味に於て互に新年の慶賀を交換し其の前途を祝福す。

(次第不同)

東京市赤坂一ツ木町  
常玄寺 森川 日修  
四谷南寺町  
法恩寺 秋山 乾英  
牛込原町(青村)  
常樂寺副住 山根 日東  
早稲田南町  
正法寺 木村 日保

小石川原町

本念寺 大須賀 玄遊  
久堅町九〇 德香會 教務所  
德香會 會主 小竹 圓明  
本郷蓬萊町  
顯本寺 池澤 日辰  
下谷初音町  
本授寺 笠原 琢瑞

七軒町

妙顯寺 長谷川 義一  
上根岸 一六  
顯本教會 柳生 正生  
京橋月島西仲通り三ノ二  
月島立正會主任 吉井 乾淨  
府下池袋字蟹ヶ窪  
盛泰寺副住 安田 台城  
東京市淺草永住町  
妙經寺 野口 日主  
南松山町  
法成寺 關田 日城  
新谷町  
壽仙院 森川 泰修  
吉野町  
常福寺 金阪 義昌  
府下品川町南品川  
本榮寺 高木 日靖  
同  
妙蓮寺 笹川 日堂  
同  
本光寺 今成 日誓

同 清光院 伊保内教精  
 同 眞了院 大森 日榮  
 大井町五、二二三 井上 清純  
 大森町山谷 立正教會 大原 亮  
 入新井町新井宿 善慶寺 石渡 英哉  
 雜司ヶ谷水久保 本教會 井村 日咸  
 (常樂寺出張所) 田島 義潤  
 (元寬受院) 同 龜原 圓常寺 鈴木 日雄  
 巢鴨町染井 蓮華寺 土屋 信玄  
 小笠原父島大村 法蓮寺 木谷 常榮  
 神奈川縣戸塚在飯田 本興寺 三上 義徹

橋樹郡大綱村大豆戸 本乘寺 前田 圓整  
 中原村字神地 統一團員 西山喜太郎  
 小田原幸町 妙經寺 三橋 會要  
 朽木縣鹽谷郡北高根澤村字上柏崎 妙顯寺 芝沼 瑞良  
 茨城縣鹿島郡若松村太田新田 長照寺 田久保日城  
 高田市紺屋町 顯本寺 矢野 聖顯  
 臺灣臺中新富町 顯本教會 松鷄 妙明  
 朝鮮釜山大廳町三丁目 顯本教會 橫山 惠正  
 支那營口 妙光寺 岡松 乾丈  
 千葉縣千葉郡幕張町長作 長嵐寺 胡蝶園莊夢  
 千葉市本町一丁目 本圓寺 草切 信榮

千葉縣千葉郡生實濱野村濱野 本行寺 橫山 會章  
 北生實 本滿寺 黑須 無外  
 市原郡湊津村下野 本泰寺 星野 純義  
 喜多 壽福寺 今井 俊貞  
 調井戸 泰行寺 鷄澤 純貞  
 古郡邊 行福寺 小池 辨碩  
 市西村海士 泰安寺 秋葉 日虔  
 姉ヶ崎町 妙經寺 松井 道安  
 同(牛込原町常樂寺) 寶藏寺 野口 會英  
 同(舊姓森川) 長遠寺 高岡 文憲  
 同 常教坊 山下 純秀

君津郡佐貫町 安樂寺 齊藤 見玉  
 木更津町 成就寺 小竹 俊雄  
 馬來田村眞里谷 本立寺 德 會暎  
 安房郡館山町 本蓮寺 小林 日種  
 市原郡内田村原田 本傳寺 栗原 顯有  
 長生郡長柄村山根 飯尾寺 飛山 日甫  
 同 滿藏寺 長岡 育應  
 船木 安樂寺 山本 賢乘  
 味庄 常光坊 岡元 教一  
 二宮本郷村國府園 如意輪寺 成嶋 日衛  
 庄吉 福庄寺 竹内 顯領  
 眞名 本源寺 秋葉 日敬

山崎 (東京水郷道分) 妙行寺 野老 乾一  
 豊田村小林 大乘寺 宮川 日佑  
 長尾 寶泉寺 成島 隆康  
 腰當 光福寺 牧野 恂義  
 本納町 蓮福寺 川崎 英照  
 同 龍教寺 富田 貞叔  
 法日 法福寺中 山形 眞瑞  
 東郷村本小幡 蓮成寺 高貫 慣一  
 豊岡村堂場 本大寺 北田 知一  
 栗生野 圓立寺 吉見 俊教  
 關村關 本法寺 小島 洗明

南日當 (品川妙國寺) 本盛寺 齊藤 昭行  
 白濱村古所 東昌寺 水谷 大雲  
 新治村下太田 萬光寺 渡邊 日命  
 桂 安立寺 小宮 智應  
 吉井 光明寺 久松 光道  
 山武郡土氣本郷町 善勝寺 溝口 會旭  
 同 本壽寺 梶木 顯正  
 大和田 寶藏寺 内田 專學  
 大椎 長興寺 米倉 義明  
 山邊村金谷 法光寺 渡邊 善儀  
 餅ノ木(藝術布教團) 法輪寺 手代木 常整

大網町宮谷

本國寺 土屋賢生  
同 運照寺 木村義明  
同 北田信昌  
增穂村上貝塚  
運成寺 森田會正  
大和村福俵  
本願寺 堂 亮雄  
田中  
法光寺 高田日暢  
丹尾  
東成寺 宮代向政  
福岡村上谷  
常福寺 鶴澤泰温  
豐成村前内  
常覺寺 中島元道  
宮  
蓮成寺 鶴澤璋温  
御門  
妙善寺 海老澤乾樹

白里村北今泉

等覺寺 松永會淳  
豐海村真龜  
淨泰寺 廣部乾山  
片貝村片貝  
本隆寺 土屋眞容  
同 敷行寺 矢田智光  
小園  
妙覺寺 河野見中  
東中  
法道寺 小高顯章  
東金町  
本漸寺 中村日錦  
臺方  
妙福寺 金坂乾受  
川場  
東福寺 天崎會温  
北之幸谷  
妙德寺 武田顯龍  
公平村松之郷  
本松寺 夏日智誓

道庭

元福寺 野口海印  
印旛郡川上村東吉田  
最成寺 塚越通曉  
佐倉町酒々井  
經嵐寺 前田日應  
彌勒  
妙經寺 田邊慎一  
千葉郡白井村多部田  
最福寺 渡邊義準  
福島縣若松市甲賀町  
妙法寺 竹内無着  
山形縣東置賜郡梨郷  
本覺寺 日暮玄靜  
梨郷村砂塚  
蓮藏寺 鈴木乾徹  
青森縣八戸町  
本壽寺 中田量叔  
北海道札幌市白石町  
顯本寺副住 本澤隆正  
同 顯本寺 總代人一同

札幌郡江別町

法華寺 木原文靜  
靜岡縣三島町  
本妙寺 森川秀光  
田方郡函南村大土肥(隆興法華寺)  
妙高寺 吉塚通榮  
伊東町致須美  
妙隆寺七壘 勳光  
庵原郡松野村北松野  
妙松寺 大津日文  
磐田郡見付町  
玄妙寺 山本通辨  
濱名郡吉津村吉美  
妙立寺 岡本圓正  
同  
正學坊 藤本智宏  
白須賀町  
妙泰寺 高橋遵碩  
愛知縣豊橋市清水町  
妙圓寺 松本堅晴  
渥美郡田原町  
當行寺 野中通玄

二川町二川

妙泉寺 加藤圓順  
碧海郡刈谷町  
長遠寺 武藤照惠  
知多郡東浦村緒川  
越境寺 三谷會善  
名古屋市古渡町  
靈山町 清水一乘  
三重縣四日市市沖嶋  
安樂寺 熊井乾堂  
京都市寺町二條  
妙滿寺中  
原田日勇  
有田宏道  
土持良達  
豐田通泰  
上京區鴨川東西寺町二條下  
本正寺 金光孝碩  
下京區高辻東洞院  
妙祐久遠寺 坪永日監  
京都府新舞鶴町九條  
信行寺 桑村常信

綾部町

了圓寺 武聖 麟  
北桑田郡知井村  
本妙寺 大塚會叔  
大阪市南區生玉前町  
堂園寺 京藤日獎  
東區西高津中寺町  
蓮成寺 上田智量  
神戸市兵庫大開通六丁目  
顯本布敷所 熊井本光  
明石市大藏谷  
圓乘寺 川崎本照  
姫路市五軒町  
妙立寺 中川日史  
同  
妙善寺 古永日洋  
岡山縣赤磐郡周臣村草生  
久成寺 田中通正  
岡山縣津山町  
本蓮寺 大川孝準  
勝田郡飯岡村吉ヶ原  
本經寺 吉塚通暎

英田郡土居村土居 本典寺 牧田 英長  
 鳥取縣鳥取市立川町 法泉寺 桔梗 開章  
 東伯郡 松崎 本立寺 富田 日進  
 廣島市新川場町 本照寺 島田 日蘭  
 松川町 妙詠寺 能仁 一十  
 廣島縣吉田町 蓮華寺 富元 會榮  
 山口縣萩町 妙蓮寺 紀野 俊耀  
 大津郡三隅村 了性院 町田 事光  
 福岡縣久留米市寺町 本泰寺 中原 通應  
 同 立正結社九州支部  
 福井縣足羽郡社村南居 妙正寺 兒玉 常宣  
 丹生郡志津村山内 本行寺 墨 照立

石川縣金澤市六斗林 本覺寺 窪田 純榮  
 中本多町 本行寺 石橋 會章  
 岡山市山崎町 本行寺 能仁 事一  
 千葉縣山武郡豐海村西野 善立寺 鈴木 正二  
 長生郡豐田村長尾 廣嚴寺 山田 誠心  
 小林 澤井 通穩  
 栃木縣宇都宮市寺町 法華寺 大川 圓精  
 同 立正結社宇都宮信仰懇話會員  
 同 福田 安吉  
 同 海野 六合  
 同 中里 雲泉  
 同 長谷川 嘉助

大阪市西區市岡町七〇五ノ參 愛 下 章 一  
 高岡市源平町 畠山 友次郎  
 東京府下上大崎五三四 統一團員 五十嵐 正  
 統一團名古屋支部  
 久米 良 昭  
 船橋 寬 治  
 船橋 金 藏

表中に付年末年始の禮を缺く  
 盛岡市外法華寺住職 木 下 圓 通  
 謹賀新年  
 大正十四年正月元旦  
 統一團神戸支部

# 精神教化

工場教化に就て：大僧正 本多 日生院下  
 本 分：……海軍中將 佐藤鐵太郎閣下  
 國民の自覺：文學士 小林 一郎先生  
 人間生活の基調：陸軍少將 野澤 錫吾閣下  
 完全の 人 陸軍少將 伊豆 凡夫閣下  
 勞働者の思想善導に就て  
 資本家に望む……文學士 小林 一郎先生

謹賀新年

發行所 統一編輯局

東京市赤坂區一ツ木町八十六番地

柏屋法服店

日蓮宗 法衣專門 中山喜太郎

電話青山四〇〇五番  
 振替東京二三〇九九番  
 市電豊川稻荷町(東約壹丁)

## 社寺建築及臺灣檜材の安價提供

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候  
 追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

東京市麴町區有樂町三丁目三番地 社 寺 工 務 所 (電話銀座三〇八八番)

神奈川縣 鶴見町 社 寺 工 務 所 鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原 社 寺 工 務 所 福岡支所 (電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地 社 寺 工 務 所 大阪支所 (電話西三二二三番)

臺灣檜材の六大大特  
 一、耐久防腐  
 二、蟻害絶無  
 三、香氣清芬  
 四、木質堅緻  
 五、木理整然  
 六、木色高雅





# 統

## 目次

統一團新年會の挨拶	本多
國家の興隆と佛法の興隆	本多
價值見直しの時代	武田
法華經要文講義	本多
罷睡録	山根
日蓮主義より見たる無量義經	井村
記事報導	日東

第廿九年貳月號

### 本多日生現下施用著書一覽

- 法華經自我講義 拾部 特價 金貳拾錢
  - 法華經要文 (賣切れ) 上製 金參拾錢
  - 教育勸語と思想問題 拾部 特價 金貳拾錢
  - うゐの奥山今日こえて 拾部 特價 金貳拾錢
  - 此の際に於る吾人の覺悟 拾貳部 特價 金拾貳錢
- 以上各送料一部金貳錢

### 統一編輯局

料告廣一統	價定一統
四分一頁	一冊
五分一頁	半冊
金五	金壹圓貳拾錢
金九	金貳圓貳拾錢
金四	送料共
事之金前	送料共

### 大僧正本多日生師著 國と人と教

一部金拾五錢 送料金二錢 拾五部特價金壹圓 (送料共)

### 發行所 統一編輯局

接替口座名古屋一〇八一九番

大正十三年十二月十七日印刷納本 (第三百五十八號) 大正十四年一月一日發行

製複許不

編輯所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
 發行所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
 印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地  
 印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
 印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地  
 印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
 印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地